

又あるなり、（裏表）うらうへのひさをつきて、左右の袖をのへて、手をあさへて、※1（糾へて）（抱き）其手におとし入ていたきとる也、この。説ある也云々、

※1 ①② 其中におとし入て、

(166) 一 まりうけ取て後をのつから又あくる事

西行云、鞠をうけとる事ハ、日入時かすおほくあかりて又あくへからぬ時のしハさ也、（仕業）それをもし案内しらぬ人のをのつからなをあくるにハ、うけとりつるまりハ秘して、（異鞠）ことまりをあくへき也と先達さためけりと云々、

本云

書本奥書云

宝治第二天春三月候、以師匠御本書写畢、師匠御物語云、此本是世間未流布物也、以頼輔卿自筆本書写之乎、而件本焼失畢、此相傳之外他家一切所無也、隨分秘書也、雖然、猶此道依志深者許之云々、更不可外見云々、

文明十五年七月四日書写了、

件上下二帖、賀茂継平縣主借送之間、書写了、老後余執猶不可説也、

按察使藤原朝臣親長

六十歳

此一帖上下、以右奥書之本令書写、於愚身者雖

55才

為無用、秘書之由傳説之間、卒爾令書写者也、
于時弘治二年三月下旬 兼智（花押）

（貼紙）

墨付五拾五丁

◎（黒印印文祐頼）

付記 貴重な文献の翻刻・掲載をご許可下さった財団法人前田育徳会尊經閣文庫に御礼申し上げ、また、貴重な文献の閲覧・複写をご許可下さった諸図書館・文書館にお礼申し上げます次第である。（渡辺融）

54才

54ウ

からず、かす(数)をあまたあくる也云々、

其後、誰説そと尋申へきよし思ながら、まりはてゝのち

ワ(忘れて)すれてやミ侍にき、口おしき事也、件日管絃侍き、先

人笛、宮内卿有資拍子(ママ)、忠基忠基。つけうた、後にハ拍子ゆつり

えてとられき、笛も時々ふかれき、教長今様うたひなど

して興ありき、拍子のひハれたるをミて、有賢(千割れ)いはく、

心なき人うちてけり、拍子ハ先本をよせてかミ(上)をうつな

り、ならひなき人ハ上下同様にはなちうちてハわるゝ也

と云々、

まりの事にあらねとも、同日の事の興あるによりて書そ

ふる也、

※1 ③ けいたすへし、

④ 戯 ぐえいたすへし、

(164) 一 晩景のまりの事

式云、大貳説云、顯季卿、たかゝるへからず、木のなかに

ふかくいるへからず、枝のなかにふかく入へからず、枝

にとゝまる遺恨也、

又、式云、与州長實卿、説云、晩景のまりハしきりにこふ

へし、

師説云、晩景になりておほつかなきにハ(続け乞ひ)つゝけこひを

する常の事也、又云、たかくこひていたくおとしかけず、

あしたかにてたしかにあくる也、枝の上にあくへからず、

枝にとゝまるハ失礼也、されハとまるほとに木にかけぬ

52ウ

なり、景忠か説同前、

景忠云、資方云、はしめより興に入ぬるハみくるしきな

り、晩景にのそミて心をつくして侍るよき也、又人もい

ミしかるなり、

家平云、成平云、晩景のまりハ鞠庭(外)のほかに(落)をちたるハ

とりあけぬ也、扇してかき入へし、いそぎいるゝ心也、

手にとりても※1まいるハをそぎ也、

※1 ③ ④ もちまいるハ

(165) 一 晩景の鞠うけとる事

式云、大貳説云、其日のふるき上手とるへし、よくく

いたりてかたきなき時のし(仕業)ワきなり、其作法ハ日入ほと、

まりのかすおほくあかりて興ある時、其まり三度あけて

後、かたひさをつきて袖にうけてとる也、その後又あけ

すしてやみぬ、但其日の主人、子細をしらす又あけハ興

なし、仍主人此様をしりたらん時の事也、又上臈の上手

まりをとらんにハひさをつくへからず、先年尊重寺の

か(懸)ゝりにて野監物忠資とりて後ハ、みえすと云々、

師説云、資方云、先年尊重寺のかゝりにて忠資とり候し

ハ、二足の後たかくこひて、左のひさをつきて、左の手

して右の袖のしたをとりて、うけとりき、其後とる人き

こえず、行元云、近實云、右のひさをつきて、右の袖し

てうくるなり、舊老の最上手のすへき事也云々、

聖人西行云、まりをうけとるハ、袖にうくるやうのほか

53ウ

53オ

— 35 —

ける也、されハすくにあかるそと申き、すこしそはみたる
(側みたる)
やうにそあひし、風にハまさしくむかはさりき、

源九云、上手をハ風の下に可立、次の足をハ風上ニ可立、
上手ハ身にかゝれとも、心にまかせていつかたへもはな
つ也、次の足ハ風のうへにてハやらんと思はねとも、人
のもとへゆく也云々、

(153)

一 木の中よりいたしたる鞆又いれぬ事
(出だしたる) (入れぬ)
(若くて)

師説云、ワかくてまりこのみいてし時、まりをいたして
(懸け)
又木にかけたりしかハ、實經云、木の中よりいたしつれ
ハ、又木にかくる事ハあるましき也云々、そのうちたも
ちてさる事をせすと云々、

(154)

一 よこさるまりの事

師説云、よこさるまりハつよくける也、よハきハひかま
(塞きさまに)
りになる也、まりのゆく方をせきさまにあくる也、成平
説同前也、

(155)

一 まりを心にまかせ。おもふ事
(恐るゝ)

源九云、まりの心にまかせてオほゆるにハ、をそるゝ心
(恐るゝ)
なし、枝の中をわけて入るゝハ、枝にあたれとも、とを
くもちかくも身にかゝるも、心にまかせておほゆれハあ
やまちなし、

(156)

一 鞆をそれて又をそれぬ事
(恐れて)

式云、師説云、心には木の枝をおそれす、又心のそこに
(底)
は用意のあるへき也、よりてをそれ不恐云々、

49
ウ

此式、云師説とかきたるハ成平也、式ハ拾遺納言成通作
也、さて成平ハ師なれハ師説と書也、此口伝集に成通卿
を師説と書きたる定なり、

(157)

一 木をおそるへしやないなやの事
(恐るべしや)
(落す)

式云、与州説云、まりをおとすといふとも、なををそる
へからすと云々、成平并資方説云、なを明足の後
(出ださず)
いたさずしておちハ尤遺恨也、よりて枝の下よりひらめいた
(平め)
すと云々、今案、此両義尤上臈下臈の分別によるへき歟、
故いかにとなれハ、上臈ハ興ありてまりをおとし、興な
くてまりをおとさぬ、各このみによるへしと云々、

(158)

一 次第のある様かねておほゆる事
(次)

師説云、このつきにハいかやうなる。あるへしと、かね
(まり)
ておほゆる也、まりよくいたりてのちの事也云々、

(159)

一 まりにつきて平縁にのほり并としきミをこゆる事
(昇り) (戸闕) (越ゆる)

式云、先左足をすゝめてこしてのち右足にて上也、右の
あしをすゝむれハ、拍子たかひてまりおつるなり、
師説云、はや足ハ右をすゝめてのほりて、左をふミかへ
(早足)
て右足を鞆にハあつる也云々、

(160)

一 こつなをこふる事
(越ゆる)
※1 (越ゆる)

師説云、成平かたてしとミのこつなをこえてまりをあけ
(立 膝)
たりき、成平ハをとり足ハこのまねとも、こつなをこゆ
(躍足)
るハ則をとり足也、きハめたる人ハいかなる足もみなし
(筋)
りてもちなから、このまぬすちのことをせぬ也けりと

50
ウ

50
オ

※1 (目) (E) はしる事も、

(142) 一 たしかに人にワたす事(渡す)

師説云、人にうけとりよくワたすへし、枝にあたるかきりハ、いくたひもおなし人のまりならば、うけとりよくはなつによりて也、

(143) 一 かすある鞠二足にすぎさる事(過ぎざる)

師説云、成平云、かすあるまりハ一二足にすくへからすと云々、

(144) 一 とをくいつるまりの事(遠く出づる)

師説云、まりさきにゆきてまりをうちにこむへし、立むかひかたくてをひさまならハ、のひて、あけ足ハつち(追ひ様)際ハにおとしたて、ワつかに足のくひにあて、はね

かへすへし、をよはぬまり一よくあくるハやかて(離む)

ひかむなり、ひきにはねあけて、つきの足をたちなをり(低)

て、まりにはへおもむくへきなり云々、源九説同也、(鞠庭)

(145) 一 をもき鞠とくさくる事(重き)

八条云、おもき鞠ハ枝にあたりてとをくさる也、かろき

まりハ枝につよくあたれとも、とをくハのかぬ也云々、

(146) 一 まりにまことといふ事(真) (ママ) ※1

八条光親云、修理大夫顯季云、まりにハまことといふ事のある也、年わかきをりハ、身もかろく足もきよふるまはるゝおりハ、いかなるまりもあやまちなし、おいの(老の)後ハ、まりをワ(我物)か物にしてゆへありてあくるをまこ(放)ちハ、まりをワ(上ぐる)か物にしてゆへありてあくるをまこ

47ウ

とといふ也、まことしらぬハ鞠にあらず、

※1 (目) (E) まことといふ事

(147) 一 上手ハしけくあふ事(繁く)

師説云、上手のもとへハまりのしけくゆくなり、されともかすをハ(数)すくなくあくる也、

(148) 一 入れわつらふ鞠しかりいる事(入れ煩ふ) (叱り入る)

師説云、實經ハいるゝまりの枝にあたりてたひくかへりしをハ、しかりてしいあれし也云々、(強い入れし)

(149) 一 かたき所の鞠はしめの足にこしらふる事(難き)

源九云、かたき所のまりハ、はしめの足をハつよくあてぬなり、よういしてつきの足をしたゝかにあつる也、(用意) (次の足)

(150) 一 鞠しめりたるをりのあし心すへき事(幸平) (朝鞠)

ゆきひらかいはく、家平云、あさまりや又雨の後にハしめて、まりしめりたるをりハのひ足こゝろすへし、まり

をふむ事のある也と成平か申し也云々、

(151) 一 まりをはなちて猶目をかくる事(放ちて)

師説云、はなつとおもへとも、をのつから木にあたりてはねかへす事のあるハ、もとの人のまり也、心をかけてたしかにうけとらぬかきりハ、めをかけてみるへしと云々、(目をかけて)

(152) 一 風ふく日のまりの事

師説云、先年成平大風の日、たゝの時のやうに鞠をすくにあくるをあやしむに、成平も、風にむけてつよく(直に上ぐる)

48ウ

48オ

るハ徳なり、又木のもとによくたちてこふへき所をこひ
て、足こまかにあらねともありさましりたる、一の徳な
り、かやうのとくみなをかねてよきハ別事也、少々もそ
なへたるをまり足といふなり、

45ウ

(135)

一 数ある^(数ある)鞠足たかくつかふ事

師説云、成平云、かすになりぬれハ、いたくおとしかく
へからず、足たかにてたしかにまりをあくへし、

(136)

一 かすある鞠木にかけぬ事

師説云、枝のうへにあけてとめつる、そくかふなり、
木の中にこめておほつかなき、口おしき事也、かすにな
りぬれハ、木にかけすしてなかにあそはして、鞠たけも
ひきになりて、たしかに人にゆつるべし、

(137)

一 鞠をそむきてめぐりあふ事^(背きて)
^(廻り合ふ)

師説云、左さまにゆくをひさまに^{たり敷}あへハとをくなるを、
右さまに^(立離り)たちさかりてあへハ、とくめぐりあふことのあ
る也、おりにしたかひていてくるやう也、必一様にもあ
るへからず、

46オ

(138)

※1 ① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩ ⑪ ⑫ ⑬ ⑭ ⑮ ⑯ ⑰ ⑱ ⑲ ⑳ ㉑ ㉒ ㉓ ㉔ ㉕ ㉖ ㉗ ㉘ ㉙ ㉚ ㉛ ㉜ ㉝ ㉞ ㉟ ㊱ ㊲ ㊳ ㊴ ㊵ ㊶ ㊷ ㊸ ㊹ ㊺ ㊻ ㊼ ㊽ ㊾ ㊿

一 やの軒と木との^(狭間)はさまの鞠たかくあくる事^(上ぐる)

八條冠者光親云、やの^(屋の軒)のきちかき木の中にてハ、のきよ
りたかくあくへし、鞠には^(庭)いれ心ありてゆかミぬれハ、
のきの内へ入也、又のきの内へいれしとたかくあくへし、
ひき^(低)なれハうちへハいる也云々、

(139)

一 物さハ^(騒がしかるべき)かしかるへき事

師説云、まりならふはしめにハ、身のならんやうもしら
す、はしりめぐりて物さハかしかるへし、上手ハしつか
に^{※1}こそミゆれとて、はしめよりしつかになりぬるまりハ、
はや足^(早足)にはならぬ也、物さハかしくはしりめぐりて、い
つれの足こそかなハねと思事なくならひて、功のいる
まゝにしつまるへき也、

※1 ① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩ ⑪ ⑫ ⑬ ⑭ ⑮ ⑯ ⑰ ⑱ ⑲ ⑳ ㉑ ㉒ ㉓ ㉔ ㉕ ㉖ ㉗ ㉘ ㉙ ㉚ ㉛ ㉜ ㉝ ㉞ ㉟ ㊱ ㊲ ㊳ ㊴ ㊵ ㊶ ㊷ ㊸ ㊹ ㊺ ㊻ ㊼ ㊽ ㊾ ㊿

(140)

一 足の漸々よくなる事

師説云、たとへは、かへりあし一をならハんとて、其よ
くなりて、又の^(延足)足をならへは、もとのかへり足よりハ
よくなる也、したいに^(次第)一つならふかいつれもよくなる
也、たゞいつれともなきハ、その足ひとつにまさるとも
おほえぬなり、さてその足ニそかなはねとも、またすく
れたるともおもひならふ也、

(141)

一 鞠を枝にこむへからさる事^(籠む)

師説云、こす^(梢)糸にむかひさまにまりをこむへからず、
とまる也、又はねかへすもあらしなり、いかにも枝を
ひやうに^(飛様に添へて)そへてあくるか、つよけれともぬるくミゆる也、
たとへは、はしる馬も^{※1}おなし方にむかひてはしるは、あ
たれともつよからず、たゞあゆむにも、むかひさまにあ
たるハあしきやうに、まりも木の枝にそひてのほるハ、
つよけれともあからぬ也、

47オ

46ウ

(127) 景忠云、資方云、かすあるまりハ一兩足にハすくへか
(過ぐべからず)
 らす、はやく人のもとへやるへし、
 一 まりをぬるくみする事
(微温く見する)

師説云、足のまうけハ心の内にいそきて、足をもてあく
 る事ハいそかぬ也、おとしかけてつよく足にあつるハ
(鞠音)
 まりをともよくしつかにあかる也、さてまりのねはくミ
(粘く)
 ゆる也

(128) 一 たかきまりの事

源九云、たかきまりハつよくける也、やハラかにあつれ
 ハひかむ也、

44オ

師説云、たかきまりハ久不可待、たちしつまりてまでハ
 ひか事いてくる也、足をふミかへてたちさたまらて、お
 ちかゝるほとをはからひて、拍子をあはせて、足ふミを
 してあくへし、

(129)

一 雲に入事

元歟
 行之云、近實か申ハ、鞠のあたたまを足にあつる也、常ハ
※1(緒を)
 足のをとりてくゝりめを足にあつる也、雲に入ハま
(括目)
 りをひらさまにもちて、あたたまを足にあつる也云々、

※1 (E) 足のをとりて

(130)

一 枝の上よりなかるゝ鞠の事

師説云、枝の下に立たる人のもりておちハあけんとつ
(漏りて落ちば)
 きたるに、枝のうへよりほかになかれいつるハ枝さきに
(乞分)
 立たる人のまり也、こひわかちてあくへし、もとよりつ

(131)

きたれハとて、枝さきの人まかせてゆつらは、あくへし、
 一 わかまり人の鞠わか事
(我鞠)
(空)
(乞分)
(異)

44ウ

(132)

源九云、ワかまりハそらにてとくこふなり、もしこ
(人)
 と人こふ物ならハゆつりて、しかもしたかふへし、但こ
 の道しらぬ人のかたハラにたちてハ、内損つくなり、お
(懸)
 ほかたかゝりの鞠をわか事ハ、きハめてありかたき事
 ハ、まり足ハ木の左右をわかちて立たるに、枝にしたか
 ひてわか事也、此比の上手ともふんの鞠しりてわか事
(分の鞠)
 みえず、是をしりたる人ハ盛實・隆經許也云々、
 一 いるゝ鞠はしめの足に入ぬ事
(入るゝ)

45オ

(133)

師説云、まり庭よりほかにいつるまりハ、はしめの足に
 入へからず、まつうるハしくけとりてのちに、我もの
(入れ足)
 に思てのちいれ足にハなるへし、はしめの足にいれんと
 すれハ、木にあたりていと出也、うけとりて後えたを
(枝)
 見はからひて、うへをもこしなかもとをして、おもふ
 さまにいろゝ也、

一 上はのとかにて下はやき事

源九云、上手のまりハよと河のやうなる也、よと河ハう
(淀河)

へハぬるきやうにて、そこはやき也云々、

(134)

一 鞠の勝劣わか事

源九云、まり足ハ徳とものある也、身のありさまよくて
(鞠足)
 まりかゝるあり、一の徳なり、又すかたよからねとも足
(姿)
 のあたる、一の徳なり、又のへ足・かへり足一つゝもあ
(延足・帰足)

あくるハちからなき事也、枝をこしてよれどもをそから
す、いかにもうちさまにまりをさきたてゝもてゐるなり、
※1 (内方)
(目) (入る) さかりかゝりて

42
オ

(117) 一 いるゝ鞠枝こしにはなつ事
まりを枝にかけて枝より内まではなたんとてハ、枝にそ
へてこして、たちいりて後はなつ也、枝のとなからは
なたんと思はんには、枝のうへよりかねてゆかめてい
るゝ也、されハわかたちとをのきて、むかひの人うけ
とる也、枝をこしてうちにてゆつり足けんとして、そへて
こしたるまりを人のとるはひか事也、いかにもゆつり足
ハしるきなり、
(著き)
(平め出だす)
一 ひらめいたす事

(118) 師説云、成平云、明足の後ハひらさまにいそぎいたすへ
き也、もし我もとにてあやまちいてきぬれハ、明足の
きゆるなり、
(消ゆる)
(遠き)
一 とをき鞠物にあつる事

(平様)

(119) 師説云、まりのとをくのくを、あてつへき物のあるには、
それにつよくあつれば、ワかゝたにとくちかくかゝりに
て、ついにちにあてゝなけかへすを、むかひあひて一足
(外に)
(外に) とにむきなからあてゝ、つきの足にまりはにむきてもて
いられたりき、かやうの事也、
一 目より下しつかにみるへき事

42
ウ

(120) 成平云、先年めしによりて花園左府に参て、まりの会は

てゝ被仰て云、我まりいかゝみると被仰に、目よりしも
しつかに御覧する、さうなき事候と申かハ、すこふる御
気色よかりきと云々、

(121) 一 四方を可存事

師説云、まりをあけて此鞠のおちんハ、四方をみな存し
たるよき也、一方はかりをおもひたるハ、たかへはひか
事のいてくる也、まりをあけさまにおちんかたを存か、
たしかにさういなくおほゆる也云々、
(相違なく)

43
オ

(122) 一 人の鞠とるへからさる事

式云、与州説云、長實卿也、我鞠を人にハとらるとも、人
のまりをとるへからす、師説同也、

(123) 一 足をもてあくる事

源九云、足をとくもてあくる、みくるしきひかまりにな
るなり、よく／＼まちかけてをそく足をあくへし、

(124) 一 よこされてゆく鞠の事

源九云、きれてわたるまりハせくやうにあつへし、
(例の様に当つる)
(例の様に当つる) れいのやうにあつるはひか事也、
(及ばぬ)
一 およはぬまりに足をもてあくる事
(及び態に)
源九云、とをくおつるまり、をよひさまに足をもてあく
るハ、かなふましとハおもへともてあくる也、あたら
ぬにハそくかうにあらず、おもひはなちてすつるか口お
しけれハ、せめて鞠をおしむ心也、
(数)
(疾く放つ)
一 かすの鞠とくはなつ事

43
ウ

(107)

一 鞠おとしたる所にて必要な事(直す)

師説云、鞠おとしたらん所にてハ必要なすへし、さきにおちたりつるやうにまりのこぬハ口おしき事なり、其様にてなをしつるハいみしき事也、ありつるやうにまりかゝれと心にかけて、まちてなをすへし、

(108)

一 入眼あるへき事

成平云、明足なれとも、人にもワたさておちぬるハせんなき事なり、いかにもうけとりよく人にもワたすを入眼といふなり、たしかにゆつと云々、(渡さで落ちぬる)

40ウ

(109)

一 枝にかゝりてをそくおつるまりの事

源九云、枝にかゝりておちやらぬまりハ、いそかすして待うけてつゐにおつるをり、よくあひてあくへし、心をしつめて、(此方彼方鞠の伝ふを)こちかちまりのつたふをよくみさためてあふへし、

(110)

一 木に手をかけぬ事

師説云、木のもとにたちて手をかくへからず、はなハた見くるしき事也、

(111)

一 鞠の道をみすかす事(見透す)

師説云、まりのすくにおつるには、したにていたゝきてまつ也、又まりのゆかみてかゝるにハ、(筋を見て)そのすちをミテむかひあひてみる也、鞠をみるに、まりの目とのなかに枝あれハとをるまじとしる也、いかにもまりのみちをみすかしてまつ也、

41オ

(112)

一 よりなき事(の欺)

師説云、上手ハよりのきある也、よるへき所のくへき所をわきまふるを上手といふ也、

(113)

一 枝にしたかふ事(随ふ)

師説云、枝にしたかひてまりハあくる也、枝にそへて(上ぐる)こす(稍方に蹴る)※1あさまにくゑる也、つよけれとも鞠あらからず、さかさまにこむへからず、やすきまりもあらくなる也、源九説同也、

※1 ① ける

② 蹴る

(114)

一 木にそふ鞠の事(添ふ)

師説云、あるひハ上よりしもまでそひてをち、又上ハあひてもとにてのきぬ、又上にてはそハねとも、なかにてそふまりあり、いづれもゆゝしき大事なり、いそかすしてよくしつかにおとしかけて、足をいそきもてあけぬ也、其ハひか事もなくやすくおほゆるなり、

41ウ

(115)

一 心をかくる事

師説云、成平ハとをきまりをも心をかけてをめぐ(喚き)かけき、いみしかりき、

(116)

一 いるゝ鞠我身いそきいらぬ事

師説云、庭のほかへいてたる鞠を、うちさまにおもむけてつきて入にハ、なをもし、木にあたりてとへ(外へ)やいつる※1と、まかりかゝりてみる也、其を案内しらぬ人のよりて

しはしやすむる也云々、

(99) 一 屋の上にあかれる鞠の事

師説云、のきにむかふへからず、軒のしたにたち入て、

鞠庭にむかひてあくへしと云々、

源九云、ふかくあかれるまりハをそくおつる也、とくこ

ひてひさしくまつへからず、まつえもんなどつくろひ

て、なかくこひてのち、ちかくなるらんと思はんほとに、

足の拍子をあはせてあゆミよりてあくる也、ふかくいり

てはやくおつる也、其ほとをはからふへし、ふかくあか

りておつるまりハ、のきにそひておつる也、いかにも

まりにハにむかひてあくへし、おほよそ屋の上にあかる

鞠ハ、おもむきてあかるかたにしたかひて、おつるほと

をはからふへし、

39
オ

※1 (目) (ヒ) ぬるくあかりて

(100) 一 屋の廊のまりワかつ事

師説云、あめふりし日は、中門の廊のうちなとにてあま

た人たちたるハ、せはけれどもワかまり人のまりワかつ

事かたき也、其をよくくわかつへし、

(101) 一 枝にあたりてかへる鞠事

師説云、まりのほかさまにゆく方へつきてよるほとに、

枝にあたりてもとのかたへかへるにすかされておとす也、

まりにめをかけて、さる事あらハかへらんするやう

に、足ふミのまうけのあるへき也、一方のミおもひぬれ

ハ、其様たかふをりにあやまちのいてくる也、かねて可
存也、

(102) 一 木と鞠とみあハすへき事

源九云、まつ木をミて鞠をみあハする也、木の枝のおも

むきにしたかひて、まりのやうハあれば、其をみあはせ

てはからひてあふへし、

(103) 一 風ふく日のまりの事

師説云、風上のまりハたかくと思へともふけのけらるゝ

なり、心えてあくへし、

(104) 一 成平風をかゝりにてあけし事

師説云、成平かせふきし日風ふく方につよくやりて、ふ

きのくれともしゐて風をかゝりにてあけし、いみしかり

き、

(105) 一 はなちワつらふ鞠こひとる事

師説云、はなたとするか、はなたれぬ事のあるをミて、

そはよりこひかくれば、よろこひてのく也、それハ上手

のする事也、

(106) 一 鞠はかゝるへからさる事

師説云、さかり枝にかゝるまりの、いつかたともさため

なきは、まちはからるゝ也、つねにおつる方を存て、た

しかにまちかけてあくへし、上手ハ其にみゆる也、

※1 (目) (ヒ) まちハくる也、

(ヒ) まちかくる也、

39
ウ

40
オ

(興) けうあり、しかりといへとも人によるへき也、

師説云、所にしたかひ、人によるへき也、大木のもとにそひておつるにハ、つよけれハあやまりのいてくる也、

一 足をやはらうけとりて、庭にむかひてのち、つよくあくへし、凡やはらかなるハ興なくみめわるし、をそ足の、次のあしをしらておとしつるハせんなき事也、人によるへし、

源九云、いかにもつよくあつへし、但所によるへし云々、

(93) 一 木をふむ事

家平云、成平云、大木にそひておつるまりハ、あしくすれは木をくゑる也、されハ木をふみて、くつのはな(杵の鼻)にま(刎出して)りをなしかけて、はねいたしてのちに、うるハしくあつる也、

(94) 一 葉かゝりに入まりの事

式云、寮頭入道云、葉かゝりに入てみえぬまりハ、木の枝のたるかたにゆきてまつへし、

師説云、草こめのしと、葉にかくれたる鞠ハおなし

37ウ

事也、頼政云、草のなひくかたをしはみねともはからひてあつへし云々、此説鞠にかはらぬ也、葉のうこくハまりのちかき也、たかくとをりぬれハあとのハゆるかぬ也、やはらかなる枝ハまりのかゝれハたわむ也、枝のたるかたをみてよるへし、

(95) 一 しつかなるへしやいなやの事

37オ

師説云、ワかき時ハ、物さハかしくはしりめくるへし、功いりて後ハをのつからしつかなる也、しつかなるをよき事とて、はしめよりしつまりたるハ上手にならず、身をもふるまいならハぬ也、

式云、ワかき時ハ、身をすてゝ物さハかしくはしりめくりて、功いりてのち、しせん(自然)にしつかなるかよきなり、もとよりしつかなるハ、をのく興に入るをり、人(籠め)にこめらるゝ也、

38オ

(96) 一 一人にあふ時の事

師説云、一人にあふ時、ちかくよりあひてたかひにをそるゝあひたに、まりむなくおつる事あり、其ハ源九一人そたしかにあくるやうハしれる、たつぬへし、これによりて源九にたつぬる時、答云、めをあハせて人の足(目を合はせ)の下にあしをまうけて、こ鞠にはねあけてたちなをりて、次の足にうるはしくあくる也、

(97) 一 乱たるまりの事

師説云、鞠のミたれてしつまらぬにハ、中にたちいてゝまりかすをすこしおほくあくる也、さて人々たちさたまりて後はなつへし、中にたちいつるゆへハ、いつれの方にも人ミなたちめくりて、うけとりやすく、まりほかへゆくましき(料)なり、

38ウ

(98) 一 乱たる鞠やの上にあくる事

景忠云、資方云、まりの乱したる時ハ、屋の上にあけて

いつれとも、心をハなをうちにとめて、枝にあたりにて内におちは、たちかへらんするやうに、心の中に思て、足をふみて、ひとへにといつるはかりを思るへからす、うちとをかねて思はぬハ、かへることのをそく、足ふミのたかふ也、

(85) 一 ぬすミ足のこと

實經云、大木のもと又かたき所にてハ、あらく足にあ。つれハまりのおつる也、はしめの足ハこしらへてうけとりてのち、つきの足ハうるハしくあくる也、其をハぬすミあしと申なり云々、

(86) 一 まりを見くたす事

實經ハ、凡まりハかほよりしもハミぬやうにて、足もとまで見くたす也、またの中にいつるまりハ、こしをおとしすへて、つちもとまでみくたして、たしかに足のくひにのせてあくる也、

(87) 一 足をいそきてあけぬ事

師説云、まりのしつかにミゆることハ、あしををそくもてあくるなり、いそくへからす、

(88) 一 かたきあしあてゝ後やすく思へからさる事

師説云、かたきあしはてゝのちやすく思へハ、ひかまりいてゝ又おつるなり、よくゝ心をたゆまずしてあくへし、

(89) 一 上手明足人見しらぬ事

師説云、上手になりぬれハ、かたきまりもよくあひてし

36オ

つかにあくれハ、明足とも人ミぬ也、にハかにまどひてあてたるを明足といふ、上手の明足見るハ上手はかりなり、賢者賢をしる、聖者聖をしるといふ本文あり、我かしこき人のかしこき人をもしる也、我をよはぬ事をハえしらぬ事なれハ、上手明足をハ上手のミそみしれるとあるは、此文にこそかなひたれ、まことに重瞳ある人をハ、我なき人ハえミぬ也、

(90) 一 三足に鞠をいるゝ事

源九云、まり庭のほかにてたるにハ、三足にいるゝよき也云々、

(91) 一 人の足のしたよりの鞠の事

四条宮勾当仲隆語云、法性寺入道ワかくて鞠をこのミ給しとき、ひらちのありしたにことに、成平かならず足の下よりすくひあけて、たかくハあけすして、次の足をまかせたてまつりき、他人ハおもひよらぬ事也、むかひさまにハよらさりき、主にハみせすしてしたかひよりき、おちぬへき鞠をかねてみしりてよりきとみえき、

(92) 一 鞠を足にあつるつよくやハらかなる事

式云、都督云、やハらかなるきハめて気なし、但すこふるをそ足ハ我身のほとをしりてやハらあつへし、我あしのほとをしらすつよくあつれば、必失礼おほし云々、但無極はや足ハよくつよしといへともあやまりなし、又

(74) 一 まりのとかにおほゆる事

師説云、花園左府ハ、鞠の木にあたりてのくをの^(延ぶる)ふるハ、
たかまくらしてふしたるよりも、のとかにおほゆる也
云々、かねて鞠を存て任意おもふは、のとかにおほゆる
なり、

(75) 一 目よりしもひさしき事

師説云、めよりしもにて三時あるなり、心をしつかに見
くたせハひさしき也、

※1 ③ 心ちしつかに

(76) 一 きそくの事

成平云、淡路入道ハ与州の鞠をミて、足あたりハ無術上
手也、すこしき^(気色)そくなし、但わかき時ハきそくせらるへ
からず、いたりてのちきそくあるへし云々、此説をもて、
今案に、三十以前ハきそくあるへからざる歟、

師説云、鞠の心にまかせておほゆるのちの事也、
(未だしき)
またしきをりハ、きそくせんともおほえぬなり、

(77) 一 方角事

源九云、常右の方へめくるへし、若左の方にむかひてま
りきたらハ、をとりかへるへし、はやくおつる時ハ左へ
かへるへし、其かよく^{※1}ミゆる也云々、

※1 ③ ④ 其はよくミゆる也

(78) 一 興に入又身をたすくる事

源九云、一きれく興に入て、又いたく身をくるしめす

してあるへき也、^(困して)こうしてゐるハ口おしき事也、たちな
から一きれく心をつくし、又やすむるやうにふるまふ
へし、

(79) 一 鞠場の留守事

式云、資方説云、忠資云、人みなまりにしたかひて
とへい^(外)つれば、ひとりハかならずまりは^(鞠場)にのこるへし、
入たる鞠の人なくてハおつる也云々、

(80) 一 かたき足いて後ハなつ鞠やすく思へからざる事

師説云、忠資説、資方云、かたき足の後ハなつまりハや
すく思へからず、かならずおつる也、

(81) 一 まりをおとしてみる事

師説云、はしめたるか^(懸)りにてハ、まりのおつるやうし
ら歟如本
んとて、おとしてみる也、其後心をえてあくへし、

(82) 一 鞠のおつるをあくる事

師説云、成平ハ中におつるまりかならずあけき、凡ひと
庭に損する鞠ハ我ひとりかやく^(役)と思て、心をかけて必よ
りし也、

(83) 一 かたき所のまりやすくみるへき事

實經云、かたき所にてハやすくミせ、やすき所にてハか
たくみすへき也、かたきところにてハのとかにまちて、
心をしつめてみるへし云々、

(84) 一 心をとむる事

實經云、まりのとへ^(外)いつるにつきて、我身いそきてとに

34
オ33
ウ34
ウ35
オ

足をあくへし、かゝるやうにかへり足にもあくる也、身
にそふ鞠ハこしを(腰)よくつかふへし、八條光親ハ、かつ(潜)か
れハのけはりてむねよりなかくたすなり、又おほくハ
かへり足にもなる也云々、

(65) 一 明足の後はやくゆつる事

師説云、明足のうちハ、人のもとへやられて、もしおちぬ
れハくちおしき事也、いそきはなつへし、えた(枝の下)のしたよ
りひらめて鞠いたすハ、ワろき事なれとも、明足の後ハ
くるしみにあらず、たゞとくはなつなり、

(66) 一 木を(抱)いたく事

式云、木をへたてゝもとにおつるまりハ、木をいたきて
めくる也、古人説と云々、すこしとをきまりハ、木をい
たけハかゝりてよられすと云々、

(67) 一 なかにおつるまりの事

師説云、人みなうたかひて、われゆつろひ(譲ろひ)にてよらぬほ
とに、なかにおつるを、かねて存して、人のけしき足ふ
みをみまはすに、たれもよらぬをミてのふる也、このの
ひ足ハ成平第一の上手也、人にすぐれたるあし也云々、

(68) 一 木にかゝりたる鞠左右人こふ事

師説云、木にかゝる鞠ハ、うら上(裏表)にいつかたへおつへし
ともさたまらねは、左右の人をのくこふ也、かならず
しもひとりの鞠ならぬゆへ也云々、政平云、成平説同事
也云々、

32ウ

32オ

(69) 一 かみしも相存する事

源九云、鞠ハかミをのみおもひて、しもの事をしらぬハ
口おしき事也、庭にかゝりちかくせんさいな(懸)ともあり、
其を存ふるまふ也、先年に、かゝりちかくは(萩)きの
かりくひのある所にて、其にもはゝからず、又ふミもせ
す、こちかちのそきてふるまひて、資方に感られたりし
也、庭のあしき所にてハ其を心えてふるまふ也云々、

(70) 一 はりひきの事

師説云、はや足ハ、鞠の木にあたる時、はりひきをする
なり、上手のことなり、をそ足ハ(違足)さる事なし、

(71) 一 まりはに立いつへからさる事

師説云、まりはにたちいてぬれハ、左右の人のうしろに
なるもあし、又いつるまりよられず、とにむかひてあは
るゝ也、たち入て、まへに所をあらせて内へあゆミいる
也、左右の人の鞠をあくるをりハ、いよくたちいてゝ、
うちにこむへし、

33オ

(72) 一 軽々なるへき事

師説云、まりハ束帯し笏もちて、節会・行幸などの儀に
もあらず、あそひ(遊事)こと也、軽々の作法なれば、興にいり
ていかにもふるまふへし、

(73) 一 枝のさきにむかはぬ事

師説云、枝のさきにむかひてたちたるに、その枝にあた
る鞠ハ身にかへる也、あらくあひてかならずおつる也、

蹴鞠口傳集下

(61) 一 帰足事

前雍州刺史藤原朝臣頼輔撰

30
オ

師説云、かへり足ハきひすをたてゝめくる也、おほよそ、
(直に) 鞠をすくにあけて、すゝミて、たちかへりくしてなら

ふ也、教訓のときハ、ミつから鞠を手にもちて、かたよ
(自ら) りうちこして、かへりてみせられしかハ、そのまゝにま
 なひて、ミせ申なとしてならひき、師説にハ、とくかへ
 りてのち、むかひあひてまつ、しつかにてしなあるやう
 也云々、

源九云、つねハ右さまにかへるへし、たゝしおりにした
 かひて左へもかへるへし、おとしたてゝ左にむかふハ、
 人のめつらしかりてにくむ也、人おとさんと思はんには、
 さやうにすへし、又云、いかにもおとしたてゝ後かへる
(躍り帰る) なり、をとりかへるかけふハあるなり、

30
ウ

前馬助清則云、花園左府ハ、かへりてのちまりをのとか
 にまつへき也と侍し云々、

同師説云々、

(62)

一 とんはうかへりの事
(蜻蛉返り)

源九云、おとりあかりて、そらにてかへるといふ也云々、
(空)

源九ハ興に入たるをりこのミてせし事也、

(63)

一 躍足事

源九云、おとり足ハ、近實云、先右の足をおとりて、左

のあしをありきて、右足にてあくる也云々、しかれども、

経元ハ左の足をふミて、をとりて、右足をまりにあつる
※1 也、近實か説としころ心えす、この比つくくこの事

をあんすれハ、近實ハいま一年まされり、此事をはしめ
 てさとり也云々、

31
オ

師説云、をとり足ハしなゝき事也、なかにもまりハ成平
 をまなふ也、成平は盛長をまなふ也、このふたりともに
 をとり足ハこのまぬなり、されはわれつたへぬ事なれハ
 をしふるにあたハす、をとり足ハ、かうらん(高欄)のうちへい
 り、木のまたにとゝまりぬへきを、おとりあかりてくみ
※1 いたすなり、しかるを、かうらんにあしかけて、さかさ
 まにたふるゝ事のいてくる也、されは尋常なる人このま
 ぬ也、おもひはなちたる也云々、よりてのそミをたちを
 ハりぬ、又源九云、おとり足ハえん(縁)の上に入鞠、かゝり
※2 にはやくおちんミたらんひハ、おとりすくふへし、又
(頭) 云、まさしくかうへの上におつるまり、たちなをりかた
(胸) く、又ハかにむねのほとおつる鞠ハ、おとりあかり
 て足にあつへし、身にまりをあつへからす云々、

31
ウ

※1 ③ けいたすなり、

④ けいたすなり、

※2 ③ おちんとみたらんひハ

(添ふ)
 ④ 一 身にそふまりの事

師説云、いそくへからす、なかしかけてあひとりて後、

- (151) 鞠シメリタルヲ心スヘキ事
 (153) 木ノ中ヨリ出鞠又不入事
 (155) 鞠ヲ心ニマカセテヲフ事^モ
 (157) 木ヲ可恐哉否事
 (159) 鞠ニ付テ平縁ニノホリ并トシキミヲコフル事
 (161) 立部内ニ入鞠事
 (163) 庭鞠事
 (165) 晩景鞠請取事

- ※1 ㊦ 可軽々事
 ※2 ㊦ 鞠のとかに覚る事
 ※3 ㊦ 難キ鞠アテ、後易不可思事
 ※4 ㊦ をもぎ鞠をとくさくる事

- (152) 風吹日鞠事
 (154) ヨコキル鞠之事
 (156) 鞠ヲ恐テ又ヲソレヌ事
 (158) 次第可有様兼テ覚ル事
 (160) コツナヲコフル事
 (162) 大極殿ノ鞠事
 (164) 晩景鞠事
 (166) 鞠請取テ後自又アクル事

- (105) 放煩鞠乞事
(107) 鞠落タル所ニテナラス様
(109) 枝ニ懸テ庭ニ落鞠事
(111) 鞠ノ道ヲミスル事
(113) 枝ニ随事
(115) 心懸事
(117) 入鞠ワカ身不入事
(119) 遠鞠物ニあつる事
(121) 四方を可存事
(123) 足をもてあくる事
(125) 不及鞠足もてあくる事
(127) 鞠ぬるくみする事
(129) 雲ニ入事
(131) 我鞠人鞠分事
(133) 上ハ静ニ下ハはやき事
(135) 有数鞠足高つかふ事
(137) 鞠ヲ乖テ廻會事
(139) 可物念事
(141) 鞠ヲ枝ニコムヘカラサル事
(143) 数有鞠不可過二足事
(145) ※⁴をもぎ鞠をとくさくる事
(147) 上手ハしけく合事
(149) 鞠放て猶目ヲ懸事

- (106) 得はからざる鞠事
(108) 可有入眼事
(110) 木ニ手ヲ不懸事
(112) 寄返事
(114) 木ニソフ鞠事
(116) 入鞠枝コシニ放事
(118) ヒラメイタス事
(120) 目より下静可見事
(122) 人鞠不可取事
(124) よこきれて上事
(126) 数ノ鞠とく放事
(128) 高き鞠事
(130) 枝上より流鞠事
(132) 入鞠初足ニ不入事
(134) 鞠勝劣事
(136) 数ある鞠木ニ不懸事
(138) 屋軒与木鞠高上事
(140) 足漸善成事
(142) タシカニ人ニ渡事
(144) 遠出鞠事
(146) 鞠ニマ事トイフ事
(148) 入煩鞠しかり入事
(150) 難所ノ鞠初足ニコシラフル事

下帖

- (61) 帰足事
(63) 躍足事
(65) 明足後早可讓事
(67) 中落鞠事
(69) 上下相存事
(71) 鞠庭不可出立事
(73) 枝前不向事
(75) 目より下久事
(77) 方角事
(79) 鞠庭留守事
(81) 鞠ヲ落テ見事
(83) 難き所ニテ鞠易可見事
(85) ヌスミ足ノ事
(87) 足急もて不上事
(89) 上手明足人不知見事
(91) 人ノ足ノ下ヨリ鞠事
(93) 木をふむ事
(95) 可静哉否哉事
(97) 乱たる鞠事
(99) 屋上ニ上れる鞠事
(101) 枝ニ當テ返鞠事
(103) 風吹日鞠事

- (62) とんはうかへりの事
(64) 身にそふ鞠の事
(66) 木をいたく事
(68) 木所懸鞠左右人上之事
(70) 針引事
※1(同字歟)
(72) 可輕之事
※2ノトカ歟
(74) 鞠の過ニ覺事
(76) 気色事
(78) 興に入又身を扶事
(80) 難鞠出後弥鞠不可易思事
(82) 鞠ノ落ヲ上事
(84) 心ヲ留事
(86) 鞠見下事
かたき歟※3
(88) 鞠足アテ、後易不可思事
(90) 三足ニ鞠ヲ入事
(92) 鞠ヲ足ニあつるつよくやハらかなる事
(94) 葉懸ニ入鞠事
(96) 人ニ合時事
(98) 乱たる鞠屋上ニ上事
(100) 屋の上の鞠ワかつ事
(102) 木与鞠可見合事
(104) 成平風ヲ懸ニテ上事

(59) 一 左にのふる事

師説云、左にのふるに、ふミかふる足ハよくはからふへし、ほとハマりにあひてそらにおほゆる事也、そのほとおほえぬまり足ハ、(側延)そはのひハかなハす、

(60) 一 右にのふる事

師説云、右にのふるにハ、足ふミいま一ひやうしなけれハ、すこしやすき事也、かやうの事ハ、上手になりてのちに、そらにおほゆるなりと云々、

以上六十ヶ條也

文明十五年卯月卅日書写終了

26
オ

以或本書之了

按察使藤原親長判

※
② この奥書ナシ

このうち、人を多みるに、則拾遺納言のほかに沓ならず
人なし、兩人はかりの事歟、

※1 ①②③ 左の足をつちに引也、

(55) 一 (延足) のひ足の事

式云、普通の人ハ左のあしをさきにふみて、まりのおつ
る時に右のあしをすゝめてのふる也、^(延ぶる) 究竟の上手ハ常ニ
右の足をさきにふみて、のふる時左をすゝめて、^{※1} 右をの
ふる也云々、

24オ

師説云、まつの右の足をすゝめてふみて、左のあしをよ
せて、右の足をのふる也、ほとハ心のうちにおほゆる也、
延足の最上手は、次の足をかへり足にあくる也、^{※2} 延足の
たちてむかひさまにやるハ口おしき事也、我かたにかけ
て、心にまかせてあくへし、のへ足の木にもあたり、
たゝものくを、やかてつゝきのひ足ハ最上手のしワさ也、^(仕業)
のふるをりに、右の足に具て身をなけやる也、^{※3} 身により
ぬれハ、つゝけてものへらるゝ也、身のおほくよりたる
にはかなはぬ事也、身ハもとの所にて足はかりのひたる
ハ、のひ足にあらず、はたかり足也、^(開足) つゝけのへ足思よ
らす、おほかた、延足ハ枝にあてゝ、かねてのひまうく
るハやすき也、まりとをしと思てのひぬハならはぬ也、
心にをよふへくもおほえねとものふれハ、はしめハたら
ねとも、^(次の度) つきのたひハはつれさまにあたり、のちくハ
のひならふ也、かくつねにならふへし、

24ウ

※1 ① 左をすゝめてのち、右をのふる也、

※2 ② 延足のよらて

※3 ③ みたによりぬれハ、

(56) 一 延足いそくへからざる事

師説云、たしかにほとををはからひあはせてをそくのふへ
し、さきにのひまつへからず、身によする事はとかるへ
し、

(57) 一 空延事

師説云、かなふましきほとなれとも、たゝのふへし、^{※1} あ
るましき事にものふへし、まりを思すてゝおしむ心のな
きも口おしければ、こゝろさしはかりをのふるなり、こ
と人のあけつへからんにハ、あるへからず、むなしくお
つる時の事也、

25オ

※1 ① あらましき事にも

② あらましき事にも

(58) 一 (帰り延足) ※1 かへりのひ足の事

師説云、木にかゝるまりにつきてよるほとに、木にあ
くつきてなけかくすまりハ、かへりてのひ足也、かへ
りたるまゝにてのふへからず、足をふみかへてのふる也、
おほろけの上手ならぬ人ハかなはぬ事也、のひての
かへりあし、^(帰足) また身をなくることなしにをはりぬ、

※1 ① かへりのゝひ足の事

※2 ② なけかへすまりハ、

式云、資方云、三拍子あるへしと云々、今案に、其儀未得意、先達ニ可尋、先達口傳云、足(數)(繁)かすしけるへからず、またしつむへからず、ワかき時ハ、身をすてゝ物

さハかしくはしりめくりて足をあつへし、切※1のいるにしたらひて、自然にしつかになるよし、もとよりしつめる

まりハ、をのく興(籠め)にいる時、こめらるゝ也云々、

師説云、おほまたにて、常に右の足をうかへてふむなり、鞠にあはぬをりも、足をふみかへし(浮かへ)して、うかひて、ふみとふめてたつへからず、たちうかひて徘徊すへき也、
22ウ

鞆鼓拍子にふむ也、

※1 功

(48) 一 三拍子事

師説云、先右足をふみて、次に左をまりにむかへて、右の足にまりをあてゝ、とうとならず、大鼓のこゑ也、是を三拍子といふ也云々、

源九云、先右の足をあけて、次に左の足を上、又右のあしをあけてふみ、けるを三拍子とする也云々、

※1 ② まりにむかへてふみて、右の足に……

(49) 一 うしろ足(踏む)ふむへからざる事

師説云、まりかゝるとて、うしろへのきさまに足ふむへからず、つゆはかりもまりのきぬるに、足にあつる事なし、身にかゝりてまりのこんをりハ、あゆみいてゝ、うちにかへりむかはんするやうにくへし、それハ枝にあ
23オ

たりてとまる※1ときも、たちかへりける也、

※1 ② とまることのあるにも、たちかへらるゝなり、

(50) 一 こをとり(小躍)の事

師説云、最上手ハ足ふみにこをとりをする也、三拍子のこをとり、成平かする事也、こと人ハをよハぬ事也、
(異人)

(51) 一 左足のあひしらひの事

師説云、右の足をうかへて、鞠にしたかひてふみて、左足をあひしらひてふみて、右足をあくる也、左の足のあひしらひによりて、よくハあかる也、この道にいらぬ人ハミもしらぬ也、

(52) 一 おあしめあしの事(男足・女足)

源九云、まりにハ、めあし、お足といふ事あり、め足とハ、かたき所をやすむる足也、おあしとハ、うるはしきまりたけの足也、おほかたつよきハおあし、やハらかなるハめ足也、たかきはお足、ひき(低)なるはめ足也、をりにしたかひてはからふへし、
23ウ

(53) 一 鳥をとり(躍)の事

師説云、成平ハ、まりにはにいてゝとるをり、からすをとりをせし也、五位はしめのほと(わかき時)の事也、ふるまゐるか云々、

(54) 一 左沓※1ならず事(土)

師説云、最上手ハ左の足をへちに引也、されハ沓(早足)のなる也、はや足の事也、成平よりほかになしと云々、

也、

(41) 一 身をつかふ事

源九云、まりハはしまるをりに身をつかふ、究竟の事也、
※1 身をよくふるまひてならすを、※2 つかふとハいふ也云々、

※1 ② 身をとかくふるまひて、

※2 ② みをつかふとはいふ也云々、

(42) 一 頸もちの様

師説云、くひもちハかるくしかるへからず、足もとま
 て鞠ハミれとも、うつふきてみるハうなつくやうにミゆ
(下)
 る也、しもをハ目はかりにてみくたし、※1 頸ハさくへから
 す、

※1 ② みくたすへし、

(43) 一 腰をおとしす事

師説云、まつこしをおとしすへて、こしより上ハまりに
 ちかくよりて、(狩衣) かりきぬのまへにそひておちあかるへし、
 こしおちぬねは、まりとをくなりて、様躰もわろき也と
 云々、

(44) 一 袖もちの様

師説云、人によるへき也、下臈鞠足ハ袖さ本 欺かりたる、し
 かるへき人ハ左右のそてうちひろけて、足にまりあたる
 をり、左の袖すこしもてあハする様なるへし、成平ハわ
 かくては左右の袖をひろけてたかくもちたりけれハ、几
 帳の手の物にくるふとそ、時の人いひける、としわかく

てはしりめぐりければ、物にくるうといひけり、上手に

なりてのちハ、いたくそてたかくなかりき、おほかたハ、

はや足ハみな袖のたかき也、鳥のはねにてとふやうなる

事にや、凡鷹をすへてむちをうつやうとて、右の袖をお

ろして左の袖をもちあくる、常様也、又大木をいたく様

とて、左右おなし様にひろけて、すこしいたきさまに袖

をもつなり、源九説同事也、又云、近實ハ右の袖をもち

あけて、※1 まりを足にあくるをり、しもへおろしけれハ、

はた袖のうへさまにをれあかりける、いみしかりき

云々、

※1 ② まりあしにあつるをり、

(45) 一 右の袖左にやる事

師説云、成平ハきるゝまりの目もあはせすはやきを、右
 の袖を左にこして、※1 なをさりにあてられしか、めてたか
 りし也云々、源九云、興に入ておもしろくおほゆるには、
 右の袖左にやる也云々、

※1 ③ なをまりにあてられしか

(46) 一 袖をひく事

八條冠者光親云、人にあふ時、ゆつるよしをハ袖をひき
 てしらする也、上臈にあひたてまつりてハ、御まりと申、
 常事也、只人にあひてハ、ゆつるといふへきにあらねは、
 袖にてしらする也、是ハ頭季卿のゝたまひし也云々、

(47) 一 足ふみの事

(37)

北へすゝみて、北の人の西向なる西のかたに、まりをこめてたつへし、さて、そのあとにハ、南の人北の木の南をかたむへし、北の人なをりて南向にむかハ、西の人木のもとへとくかへるへし、いかにもく木のもとを本軀にして心をかくへし、まりにしたかふとて、ちかくむかひあふへからず、うしろにみえすしてしたかふへし、

※1 ㊦㊧㊨ まりにしたかふ様

※2 ㊩ ㊪ ㊫ ㊬ ㊭ ㊮ ㊯ ㊰ ㊱ ㊲ ㊳ ㊴ ㊵ ㊶ ㊷ ㊸ ㊹ ㊺ ㊻ ㊼ ㊽ ㊾ ㊿ ㏀ ㏁ ㏂ ㏃ ㏄ ㏅ ㏆ ㏇ ㏈ ㏉ ㏊ ㏋ ㏌ ㏍ ㏎ ㏏ ㏐ ㏑ ㏒ ㏓ ㏔ ㏕ ㏖ ㏗ ㏘ ㏙ ㏚ ㏛ ㏜ ㏝ ㏞ ㏟ ㏠ ㏡ ㏢ ㏣ ㏤ ㏥ ㏦ ㏧ ㏨ ㏩ ㏪ ㏫ ㏬ ㏭ ㏮ ㏯ ㏰ ㏱ ㏲ ㏳ ㏴ ㏵ ㏶ ㏷ ㏸ ㏹ ㏺ ㏻ ㏼ ㏽ ㏾ ㏿ 㐀 㐁 㐂 㐃 㐄 㐅 㐆 㐇 㐈 㐉 㐊 㐋 㐌 㐍 㐎 㐏 㐐 㐑 㐒 㐓 㐔 㐕 㐖 㐗 㐘 㐙 㐚 㐛 㐜 㐝 㐞 㐟 㐠 㐡 㐢 㐣 㐤 㐥 㐦 㐧 㐨 㐩 㐪 㐫 㐬 㐭 㐮 㐯 㐰 㐱 㐲 㐳 㐴 㐵 㐶 㐷 㐸 㐹 㐺 㐻 㐼 㐽 㐾 㐿 㑀 㑁 㑂 㑃 㑄 㑅 㑆 㑇 㑈 㑉 㑊 㑋 㑌 㑍 㑎 㑏 㑐 㑑 㑒 㑓 㑔 㑕 㑖 㑗 㑘 㑙 㑚 㑛 㑜 㑝 㑞 㑟 㑠 㑡 㑢 㑣 㑤 㑥 㑦 㑧 㑨 㑩 㑪 㑫 㑬 㑭 㑮 㑯 㑰 㑱 㑲 㑳 㑴 㑵 㑶 㑷 㑸 㑹 㑺 㑻 㑼 㑽 㑾 㑿 㒀 㒁 㒂 㒃 㒄 㒅 㒆 㒇 㒈 㒉 㒊 㒋 㒌 㒍 㒎 㒏 㒐 㒑 㒒 㒓 㒔 㒕 㒖 㒗 㒘 㒙 㒚 㒛 㒜 㒝 㒞 㒟 㒠 㒡 㒢 㒣 㒤 㒥 㒦 㒧 㒨 㒩 㒪 㒫 㒬 㒭 㒮 㒯 㒰 㒱 㒲 㒳 㒴 㒵 㒶 㒷 㒸 㒹 㒺 㒻 㒼 㒽 㒾 㒿 㓀 㓁 㓂 㓃 㓄 㓅 㓆 㓇 㓈 㓉 㓊 㓋 㓌 㓍 㓎 㓏 㓐 㓑 㓒 㓓 㓔 㓕 㓖 㓗 㓘 㓙 㓚 㓛 㓜 㓝 㓞 㓟 㓠 㓡 㓢 㓣 㓤 㓥 㓦 㓧 㓨 㓩 㓪 㓫 㓬 㓭 㓮 㓯 㓰 㓱 㓲 㓳 㓴 㓵 㓶 㓷 㓸 㓹 㓺 㓻 㓼 㓽 㓾 㓿 㔀 㔁 㔂 㔃 㔄 㔅 㔆 㔇 㔈 㔉 㔊 㔋 㔌 㔍 㔎 㔏 㔐 㔑 㔒 㔓 㔔 㔕 㔖 㔗 㔘 㔙 㔚 㔛 㔜 㔝 㔞 㔟 㔠 㔡 㔢 㔣 㔤 㔥 㔦 㔧 㔨 㔩 㔪 㔫 㔬 㔭 㔮 㔯 㔰 㔱 㔲 㔳 㔴 㔵 㔶 㔷 㔸 㔹 㔺 㔻 㔼 㔽 㔾 㔿 㕀 㕁 㕂 㕃 㕄 㕅 㕆 㕇 㕈 㕉 㕊 㕋 㕌 㕍 㕎 㕏 㕐 㕑 㕒 㕓 㕔 㕕 㕖 㕗 㕘 㕙 㕚 㕛 㕜 㕝 㕞 㕟 㕠 㕡 㕢 㕣 㕤 㕥 㕦 㕧 㕨 㕩 㕪 㕫 㕬 㕭 㕮 㕯 㕰 㕱 㕲 㕳 㕴 㕵 㕶 㕷 㕸 㕹 㕺 㕻 㕼 㕽 㕾 㕿 㖀 㖁 㖂 㖃 㖄 㖅 㖆 㖇 㖈 㖉 㖊 㖋 㖌 㖍 㖎 㖏 㖐 㖑 㖒 㖓 㖔 㖕 㖖 㖗 㖘 㖙 㖚 㖛 㖜 㖝 㖞 㖟 㖠 㖡 㖢 㖣 㖤 㖥 㖦 㖧 㖨 㖩 㖪 㖫 㖬 㖭 㖮 㖯 㖰 㖱 㖲 㖳 㖴 㖵 㖶 㖷 㖸 㖹 㖺 㖻 㖼 㖽 㖾 㖿 㗀 㗁 㗂 㗃 㗄 㗅 㗆 㗇 㗈 㗉 㗊 㗋 㗌 㗍 㗎 㗏 㗐 㗑 㗒 㗓 㗔 㗕 㗖 㗗 㗘 㗙 㗚 㗛 㗜 㗝 㗞 㗟 㗠 㗡 㗢 㗣 㗤 㗥 㗦 㗧 㗨 㗩 㗪 㗫 㗬 㗭 㗮 㗯 㗰 㗱 㗲 㗳 㗴 㗵 㗶 㗷 㗸 㗹 㗺 㗻 㗼 㗽 㗾 㗿 㘀 㘁 㘂 㘃 㘄 㘅 㘆 㘇 㘈 㘉 㘊 㘋 㘌 㘍 㘎 㘏 㘐 㘑 㘒 㘓 㘔 㘕 㘖 㘗 㘘 㘙 㘚 㘛 㘜 㘝 㘞 㘟 㘠 㘡 㘢 㘣 㘤 㘥 㘦 㘧 㘨 㘩 㘪 㘫 㘬 㘭 㘮 㘯 㘰 㘱 㘲 㘳 㘴 㘵 㘶 㘷 㘸 㘹 㘺 㘻 㘼 㘽 㘾 㘿 㙀 㙁 㙂 㙃 㙄 㙅 㙆 㙇 㙈 㙉 㙊 㙋 㙌 㙍 㙎 㙏 㙐 㙑 㙒 㙓 㙔 㙕 㙖 㙗 㙘 㙙 㙚 㙛 㙜 㙝 㙞 㙟 㙠 㙡 㙢 㙣 㙤 㙥 㙦 㙧 㙨 㙩 㙪 㙫 㙬 㙭 㙮 㙯 㙰 㙱 㙲 㙳 㙴 㙵 㙶 㙷 㙸 㙹 㙺 㙻 㙼 㙽 㙾 㙿 㚀 㚁 㚂 㚃 㚄 㚅 㚆 㚇 㚈 㚉 㚊 㚋 㚌 㚍 㚎 㚏 㚐 㚑 㚒 㚓 㚔 㚕 㚖 㚗 㚘 㚙 㚚 㚛 㚜 㚝 㚞 㚟 㚠 㚡 㚢 㚣 㚤 㚥 㚦 㚧 㚨 㚩 㚪 㚫 㚬 㚭 㚮 㚯 㚰 㚱 㚲 㚳 㚴 㚵 㚶 㚷 㚸 㚹 㚺 㚻 㚼 㚽 㚾 㚿 㜀 㜁 㜂 㜃 㜄 㜅 㜆 㜇 㜈 㜉 㜊 㜋 㜌 㜍 㜎 㜏 㜐 㜑 㜒 㜓 㜔 㜕 㜖 㜗 㜘 㜙 㜚 㜛 㜜 㜝 㜞 㜟 㜠 㜡 㜢 㜣 㜤 㜥 㜦 㜧 㜨 㜩 㜪 㜫 㜬 㜭 㜮 㜯 㜰 㜱 㜲 㜳 㜴 㜵 㜶 㜷 㜸 㜹 㜺 㜻 㜼 㜽 㜾 㜿 㝀 㝁 㝂 㝃 㝄 㝅 㝆 㝇 㝈 㝉 㝊 㝋 㝌 㝍 㝎 㝏 㝐 㝑 㝒 㝓 㝔 㝕 㝖 㝗 㝘 㝙 㝚 㝛 㝜 㝝 㝞 㝟 㝠 㝡 㝢 㝣 㝤 㝥 㝦 㝧 㝨 㝩 㝪 㝫 㝬 㝭 㝮 㝯 㝰 㝱 㝲 㝳 㝴 㝵 㝶 㝷 㝸 㝹 㝺 㝻 㝼 㝽 㝾 㝿 㞀 㞁 㞂 㞃 㞄 㞅 㞆 㞇 㞈 㞉 㞊 㞋 㞌 㞍 㞎 㞏 㞐 㞑 㞒 㞓 㞔 㞕 㞖 㞗 㞘 㞙 㞚 㞛 㞜 㞝 㞞 㞟 㞠 㞡 㞢 㞣 㞤 㞥 㞦 㞧 㞨 㞩 㞪 㞫 㞬 㞭 㞮 㞯 㞰 㞱 㞲 㞳 㞴 㞵 㞶 㞷 㞸 㞹 㞺 㞻 㞼 㞽 㞾 㞿 㟀 㟁 㟂 㟃 㟄 㟅 㟆 㟇 㟈 㟉 㟊 㟋 㟌 㟍 㟎 㟏 㟐 㟑 㟒 㟓 㟔 㟕 㟖 㟗 㟘 㟙 㟚 㟛 㟜 㟝 㟞 㟟 㟠 㟡 㟢 㟣 㟤 㟥 㟦 㟧 㟨 㟩 㟪 㟫 㟬 㟭 㟮 㟯 㟰 㟱 㟲 㟳 㟴 㟵 㟶 㟷 㟸 㟹 㟺 㟻 㟼 㟽 㟾 㟿 㠀 㠁 㠂 㠃 㠄 㠅 㠆 㠇 㠈 㠉 㠊 㠋 㠌 㠍 㠎 㠏 㠐 㠑 㠒 㠓 㠔 㠕 㠖 㠗 㠘 㠙 㠚 㠛 㠜 㠝 㠞 㠟 㠠 㠡 㠢 㠣 㠤 㠥 㠦 㠧 㠨 㠩 㠪 㠫 㠬 㠭 㠮 㠯 㠰 㠱 㠲 㠳 㠴 㠵 㠶 㠷 㠸 㠹 㠺 㠻 㠼 㠽 㠾 㠿 㡀 㡁 㡂 㡃 㡄 㡅 㡆 㡇 㡈 㡉 㡊 㡋 㡌 㡍 㡎 㡏 㡐 㡑 㡒 㡓 㡔 㡕 㡖 㡗 㡘 㡙 㡚 㡛 㡜 㡝 㡞 㡟 㡠 㡡 㡢 㡣 㡤 㡥 㡦 㡧 㡨 㡩 㡪 㡫 㡬 㡭 㡮 㡯 㡰 㡱 㡲 㡳 㡴 㡵 㡶 㡷 㡸 㡹 㡺 㡻 㡼 㡽 㡾 㡿 㢀 㢁 㢂 㢃 㢄 㢅 㢆 㢇 㢈 㢉 㢊 㢋 㢌 㢍 㢎 㢏 㢐 㢑 㢒 㢓 㢔 㢕 㢖 㢗 㢘 㢙 㢚 㢛 㢜 㢝 㢞 㢟 㢠 㢡 㢢 㢣 㢤 㢥 㢦 㢧 㢨 㢩 㢪 㢫 㢬 㢭 㢮 㢯 㢰 㢱 㢲 㢳 㢴 㢵 㢶 㢷 㢸 㢹 㢺 㢻 㢼 㢽 㢾 㢿 㣀 㣁 㣂 㣃 㣄 㣅 㣆 㣇 㣈 㣉 㣊 㣋 㣌 㣍 㣎 㣏 㣐 㣑 㣒 㣓 㣔 㣕 㣖 㣗 㣘 㣙 㣚 㣛 㣜 㣝 㣞 㣟 㣠 㣡 㣢 㣣 㣤 㣥 㣦 㣧 㣨 㣩 㣪 㣫 㣬 㣭 㣮 㣯 㣰 㣱 㣲 㣳 㣴 㣵 㣶 㣷 㣸 㣹 㣺 㣻 㣼 㣽 㣾 㣿 㤀 㤁 㤂 㤃 㤄 㤅 㤆 㤇 㤈 㤉 㤊 㤋 㤌 㤍 㤎 㤏 㤐 㤑 㤒 㤓 㤔 㤕 㤖 㤗 㤘 㤙 㤚 㤛 㤜 㤝 㤞 㤟 㤠 㤡 㤢 㤣 㤤 㤥 㤦 㤧 㤨 㤩 㤪 㤫 㤬 㤭 㤮 㤯 㤰 㤱 㤲 㤳 㤴 㤵 㤶 㤷 㤸 㤹 㤺 㤻 㤼 㤽 㤾 㤿 㥀 㥁 㥂 㥃 㥄 㥅 㥆 㥇 㥈 㥉 㥊 㥋 㥌 㥍 㥎 㥏 㥐 㥑 㥒 㥓 㥔 㥕 㥖 㥗 㥘 㥙 㥚 㥛 㥜 㥝 㥞 㥟 㥠 㥡 㥢 㥣 㥤 㥥 㥦 㥧 㥨 㥩 㥪 㥫 㥬 㥭 㥮 㥯 㥰 㥱 㥲 㥳 㥴 㥵 㥶 㥷 㥸 㥹 㥺 㥻 㥼 㥽 㥾 㥿 㦀 㦁 㦂 㦃 㦄 㦅 㦆 㦇 㦈 㦉 㦊 㦋 㦌 㦍 㦎 㦏 㦐 㦑 㦒 㦓 㦔 㦕 㦖 㦗 㦘 㦙 㦚 㦛 㦜 㦝 㦞 㦟 㦠 㦡 㦢 㦣 㦤 㦥 㦦 㦧 㦨 㦩 㦪 㦫 㦬 㦭 㦮 㦯 㦰 㦱 㦲 㦳 㦴 㦵 㦶 㦷 㦸 㦹 㦺 㦻 㦼 㦽 㦾 㦿 㧀 㧁 㧂 㧃 㧄 㧅 㧆 㧇 㧈 㧉 㧊 㧋 㧌 㧍 㧎 㧏 㧐 㧑 㧒 㧓 㧔 㧕 㧖 㧗 㧘 㧙 㧚 㧛 㧜 㧝 㧞 㧟 㧠 㧡 㧢 㧣 㧤 㧥 㧦 㧧 㧨 㧩 㧪 㧫 㧬 㧭 㧮 㧯 㧰 㧱 㧲 㧳 㧴 㧵 㧶 㧷 㧸 㧹 㧺 㧻 㧼 㧽 㧾 㧿 㨀 㨁 㨂 㨃 㨄 㨅 㨆 㨇 㨈 㨉 㨊 㨋 㨌 㨍 㨎 㨏 㨐 㨑 㨒 㨓 㨔 㨕 㨖 㨗 㨘 㨙 㨚 㨛 㨜 㨝 㨞 㨟 㨠 㨡 㨢 㨣 㨤 㨥 㨦 㨧 㨨 㨩 㨪 㨫 㨬 㨭 㨮 㨯 㨰 㨱 㨲 㨳 㨴 㨵 㨶 㨷 㨸 㨹 㨺 㨻 㨼 㨽 㨾 㨿 㩀 㩁 㩂 㩃 㩄 㩅 㩆 㩇 㩈 㩉 㩊 㩋 㩌 㩍 㩎 㩏 㩐 㩑 㩒 㩓 㩔 㩕 㩖 㩗 㩘 㩙 㩚 㩛 㩜 㩝 㩞 㩟 㩠 㩡 㩢 㩣 㩤 㩥 㩦 㩧 㩨 㩩 㩪 㩫 㩬 㩭 㩮 㩯 㩰 㩱 㩲 㩳 㩴 㩵 㩶 㩷 㩸 㩹 㩺 㩻 㩼 㩽 㩾 㩿 㪀 㪁 㪂 㪃 㪄 㪅 㪆 㪇 㪈 㪉 㪊 㪋 㪌 㪍 㪎 㪏 㪐 㪑 㪒 㪓 㪔 㪕 㪖 㪗 㪘 㪙 㪚 㪛 㪜 㪝 㪞 㪟 㪠 㪡 㪢 㪣 㪤 㪥 㪦 㪧 㪨 㪩 㪪 㪫 㪬 㪭 㪮 㪯 㪰 㪱 㪲 㪳 㪴 㪵 㪶 㪷 㪸 㪹 㪺 㪻 㪼 㪽 㪾 㪿 㫀 㫁 㫂 㫃 㫄 㫅 㫆 㫇 㫈 㫉 㫊 㫋 㫌 㫍 㫎 㫏 㫐 㫑 㫒 㫓 㫔 㫕 㫖 㫗 㫘 㫙 㫚 㫛 㫜 㫝 㫞 㫟 㫠 㫡 㫢 㫣 㫤 㫥 㫦 㫧 㫨 㫩 㫪 㫫 㫬 㫭 㫮 㫯 㫰 㫱 㫲 㫳 㫴 㫵 㫶 㫷 㫸 㫹 㫺 㫻 㫼 㫽 㫾 㫿 㬀 㬁 㬂 㬃 㬄 㬅 㬆 㬇 㬈 㬉 㬊 㬋 㬌 㬍 㬎 㬏 㬐 㬑 㬒 㬓 㬔 㬕 㬖 㬗 㬘 㬙 㬚 㬛 㬜 㬝 㬞 㬟 㬠 㬡 㬢 㬣 㬤 㬥 㬦 㬧 㬨 㬩 㬪 㬫 㬬 㬭 㬮 㬯 㬰 㬱 㬲 㬳 㬴 㬵 㬶 㬷 㬸 㬹 㬺 㬻 㬼 㬽 㬾 㬿 㭀 㭁 㭂 㭃 㭄 㭅 㭆 㭇 㭈 㭉 㭊 㭋 㭌 㭍 㭎 㭏 㭐 㭑 㭒 㭓 㭔 㭕 㭖 㭗 㭘 㭙 㭚 㭛 㭜 㭝 㭞 㭟 㭠 㭡 㭢 㭣 㭤 㭥 㭦 㭧 㭨 㭩 㭪 㭫 㭬 㭭 㭮 㭯 㭰 㭱 㭲 㭳 㭴 㭵 㭶 㭷 㭸 㭹 㭺 㭻 㭼 㭽 㭾 㭿 㮀 㮁 㮂 㮃 㮄 㮅 㮆 㮇 㮈 㮉 㮊 㮋 㮌 㮍 㮎 㮏 㮐 㮑 㮒 㮓 㮔 㮕 㮖 㮗 㮘 㮙 㮚 㮛 㮜 㮝 㮞 㮟 㮠 㮡 㮢 㮣 㮤 㮥 㮦 㮧 㮨 㮩 㮪 㮫 㮬 㮭 㮮 㮯 㮰 㮱 㮲 㮳 㮴 㮵 㮶 㮷 㮸 㮹 㮺 㮻 㮼 㮽 㮾 㮿 㯀 㯁 㯂 㯃 㯄 㯅 㯆 㯇 㯈 㯉 㯊 㯋 㯌 㯍 㯎 㯏 㯐 㯑 㯒 㯓 㯔 㯕 㯖 㯗 㯘 㯙 㯚 㯛 㯜 㯝 㯞 㯟 㯠 㯡 㯢 㯣 㯤 㯥 㯦 㯧 㯨 㯩 㯪 㯫 㯬 㯭 㯮 㯯 㯰 㯱 㯲 㯳 㯴 㯵 㯶 㯷 㯸 㯹 㯺 㯻 㯼 㯽 㯾 㯿 㰀 㰁 㰂 㰃 㰄 㰅 㰆 㰇 㰈 㰉 㰊 㰋 㰌 㰍 㰎 㰏 㰐 㰑 㰒 㰓 㰔 㰕 㰖 㰗 㰘 㰙 㰚 㰛 㰜 㰝 㰞 㰟 㰠 㰡 㰢 㰣 㰤 㰥 㰦 㰧 㰨 㰩 㰪 㰫 㰬 㰭 㰮 㰯 㰰 㰱 㰲 㰳 㰴 㰵 㰶 㰷 㰸 㰹 㰺 㰻 㰼 㰽 㰾 㰿 㱀 㱁 㱂 㱃 㱄 㱅 㱆 㱇 㱈 㱉 㱊 㱋 㱌 㱍 㱎 㱏 㱐 㱑 㱒 㱓 㱔 㱕 㱖 㱗 㱘 㱙 㱚 㱛 㱜 㱝 㱞 㱟 㱠 㱡 㱢 㱣 㱤 㱥 㱦 㱧 㱨 㱩 㱪 㱫 㱬 㱭 㱮 㱯 㱰 㱱 㱲 㱳 㱴 㱵 㱶 㱷 㱸 㱹 㱺 㱻 㱼 㱽 㱾 㱿 㲀 㲁 㲂 㲃 㲄 㲅 㲆 㲇 㲈 㲉 㲊 㲋 㲌 㲍 㲎 㲏 㲐 㲑 㲒 㲓 㲔 㲕 㲖 㲗 㲘 㲙 㲚 㲛 㲜 㲝 㲞 㲟 㲠 㲡 㲢 㲣 㲤 㲥 㲦 㲧 㲨 㲩 㲪 㲫 㲬 㲭 㲮 㲯 㲰 㲱 㲲 㲳 㲴 㲵 㲶 㲷 㲸 㲹 㲺 㲻 㲼 㲽 㲾 㲿 㳀 㳁 㳂 㳃 㳄 㳅 㳆 㳇 㳈 㳉 㳊 㳋 㳌 㳍 㳎 㳏 㳐 㳑 㳒 㳓 㳔 㳕 㳖 㳗 㳘 㳙 㳚 㳛 㳜 㳝 㳞 㳟 㳠 㳡 㳢 㳣 㳤 㳥 㳦 㳧 㳨 㳩 㳪 㳫 㳬 㳭 㳮 㳯 㳰 㳱 㳲 㳳 㳴 㳵 㳶 㳷 㳸 㳹 㳺 㳻 㳼 㳽 㳾 㳿 㴀 㴁 㴂 㴃 㴄 㴅 㴆 㴇 㴈 㴉 㴊 㴋 㴌 㴍 㴎 㴏 㴐 㴑 㴒 㴓 㴔 㴕 㴖 㴗 㴘 㴙 㴚 㴛 㴜 㴝 㴞 㴟 㴠 㴡 㴢 㴣 㴤 㴥 㴦 㴧 㴨 㴩 㴪 㴫 㴬 㴭 㴮 㴯 㴰 㴱 㴲 㴳 㴴 㴵 㴶 㴷 㴸 㴹 㴺 㴻 㴼 㴽 㴾 㴿 㵀 㵁 㵂 㵃 㵄 㵅 㵆 㵇 㵈 㵉 㵊 㵋 㵌 㵍 㵎 㵏 㵐 㵑 㵒 㵓 㵔 㵕 㵖 㵗 㵘 㵙 㵚 㵛 㵜 㵝 㵞 㵟 㵠 㵡 㵢 㵣 㵤 㵥 㵦 㵧 㵨 㵩 㵪 㵫 㵬 㵭 㵮 㵯 㵰 㵱 㵲 㵳 㵴 㵵 㵶 㵷 㵸 㵹 㵺 㵻 㵼 㵽 㵾 㵿 㶀 㶁 㶂 㶃 㶄 㶅 㶆 㶇 㶈 㶉 㶊 㶋 㶌 㶍 㶎 㶏 㶐 㶑 㶒 㶓 㶔 㶕 㶖 㶗 㶘 㶙 㶚 㶛 㶜 㶝 㶞 㶟 㶠 㶡 㶢 㶣 㶤 㶥 㶦 㶧 㶨 㶩 㶪 㶫 㶬 㶭 㶮 㶯 㶰 㶱 㶲 㶳 㶴 㶵 㶶 㶷 㶸 㶹 㶺 㶻 㶼 㶽 㶾 㶿 㷀 㷁 㷂 㷃 㷄 㷅 㷆 㷇 㷈 㷉 㷊 㷋 㷌 㷍 㷎 㷏 㷐 㷑 㷒 㷓 㷔 㷕 㷖 㷗 㷘 㷙 㷚 㷛 㷜 㷝 㷞 㷟 㷠 㷡 㷢 㷣 㷤 㷥 㷦 㷧 㷨 㷩 㷪 㷫 㷬 㷭 㷮 㷯 㷰 㷱 㷲 㷳 㷴 㷵 㷶 㷷 㷸 㷹 㷺 㷻 㷼 㷽 㷾 㷿 㸀 㸁 㸂 㸃 㸄 㸅 㸆 㸇 㸈 㸉 㸊 㸋 㸌 㸍 㸎 㸏 㸐 㸑 㸒 㸓 㸔 㸕 㸖 㸗 㸘 㸙 㸚 㸛 㸜 㸝 㸞 㸟 㸠 㸡 㸢 㸣 㸤 㸥 㸦 㸧 㸨 㸩 㸪 㸫 㸬 㸭 㸮 㸯 㸰 㸱 㸲 㸳 㸴 㸵 㸶 㸷 㸸 㸹 㸺 㸻 㸼 㸽 㸾 㸿 㹀 㹁 㹂 㹃 㹄 㹅 㹆 㹇 㹈 㹉 㹊 㹋 㹌 㹍 㹎 㹏 㹐 㹑 㹒 㹓 㹔 㹕 㹖 㹗 㹘 㹙 㹚 㹛 㹜 㹝 㹞 㹟 㹠 㹡 㹢 㹣 㹤 㹥 㹦 㹧 㹨 㹩 㹪 㹫 㹬 㹭 㹮 㹯 㹰 㹱 㹲 㹳 㹴 㹵 㹶 㹷 㹸 㹹 㹺 㹻 㹼 㹽 㹿 㺀 㺁 㺂 㺃 㺄 㺅 㺆 㺇 㺈 㺉 㺊 㺋 㺌 㺍 㺎 㺏 㺐 㺑 㺒 㺓 㺔 㺕 㺖 㺗 㺘 㺙 㺚 㺛 㺜 㺝 㺞 㺟 㺠 㺡 㺢 㺣 㺤 㺥 㺦 㺧 㺨 㺩 㺪 㺫 㺬 㺭 㺮 㺯 㺰 㺱 㺲 㺳 㺴 㺵 㺶 㺷 㺸 㺹 㺺 㺻 㺼 㺽 㺾 㺿 㻀 㻁 㻂 㻃 㻄 㻅 㻆 㻇 㻈 㻉 㻊 㻋 㻌 㻍 㻎 㻏 㻐 㻑 㻒 㻓 㻔 㻕 㻖 㻗 㻘 㻙 㻚 㻛 㻜 㻝 㻞 㻟 㻠 㻡 㻢 㻣 㻤 㻥 㻦 㻧 㻨 㻩 㻪 㻫 㻬 㻭 㻮 㻯 㻰 㻱 㻲 㻳 㻴 㻵 㻶 㻷 㻸 㻹 㻺 㻻 㻼 㻽 㻾 㻿 㼀 㼁 㼂 㼃 㼄 㼅 㼆 㼇 㼈 㼉 㼊 㼋 㼌 㼍 㼎 㼏 㼐 㼑 㼒 㼓 㼔 㼕 㼖 㼗 㼘 㼙 㼚 㼛 㼜 㼝 㼞 㼟 㼠 㼡 㼢 㼣 㼤 㼥 㼦 㼧 㼨 㼩 㼪 㼫 㼬 㼭 㼮 㼯 㼰 㼱 㼲 㼳 㼴 㼵 㼶 㼷 㼸 㼹 㼺 㼻 㼼 㼽 㼾 㼿 㽀 㽁 㽂 㽃 㽄 㽅 㽆 㽇 㽈 㽉 㽊 㽋 㽌 㽍 㽎 㽏 㽐 㽑 㽒 㽓 㽔 㽕 㽖 㽗 㽘 㽙 㽚 㽛 㽜 㽝 㽞 㽟 㽠 㽡 㽢 㽣 㽤 㽥 㽦 㽧 㽨 㽩 㽪 㽫 㽬 㽭 㽮 㽯 㽰 㽱 㽲 㽳 㽴 㽵 㽶 㽷 㽸 㽹 㽺 㽻 㽼 㽽 㽾 㽿 㿀 㿁 㿂 㿃 㿄 㿅 㿆 㿇 㿈 㿉 㿊 㿋 㿌 㿍 㿎 㿏 㿐 㿑 㿒 㿓 㿔 㿕 㿖 㿗 㿘 㿙 㿚 㿛 㿜 㿝 㿞 㿟 㿠 㿡 㿢 㿣 㿤 㿥 㿦 㿧 㿨 㿩 㿪

師説云、たとへは、東北の角の木に二人たちたる人の南より(放るゝ鞆)はなるゝまりハ、東の人のまへにおつるハ、ちかけれとも東の人のまりにハあらず、北の人のなり、東の人ハ引いて、北の人にまかすへし、まりのむかいてくる人のなるかゆへ也、西よりはなれんまり、また東の人にまかすへし、但まへに枝ありてかゝりなハ、枝よりおちんかたにしたかひてわかつへし、凡まりのおもむきておつるかたにしたかひて存へし、そらよりぬし(空)こひわ(乞ひ分)かつへし、ちかけれとも枝をへたつれば、我まりにハあらず、但人よらすハとをくともあくへし、はなつまり、枝にさハリぬれば、なを我まり也、

18オ

源九云、我まりハおちぬさきに、そらにあるをりはやくこふへし、もし人こハ、まかせなからしたかふへし、もし損せは必ずくひあくへし、又云、案内しらぬ人のかたハらに立てハ、内損つく也、かゝりのまりミわか(懸)かつ事(見分)ハありかたき事也、太やうハ枝さしにしたかひてわかつへし、近代上手ともわかちかたし、わつかに三四人ハ※2かり、成實・隆経等也、此段下巻にもあり、如何、

※1 ② 枝にさはりてや

※2 ② ハかりなり、

34 一 まりにあふ様事(合ふ)

式云、伊与守説云、まりにつくハ(付く)とりあハセのことしと云々、其故ハとをくたつことなし、をそひてあゆミかゝ

18ウ

りてたつへし、まりのあひたおこたるへからず、あしをきか敷※1をうかへ、身をかるくしてたゝすむ、たちしつむへからすと云々、

師説云、まつ腰をおとしすへて、かほよりちかく(流し下す)なかしくたすへし、のけはるへからず、いかにも(鞆庭)まりにハをそむきて一足もあつへからず、まりにハにむかひてまつへし、

※1 ② ③ たゝすむへし、たちしつむへからず、

35 一 まりをこむる事(籠むる)

式云、ワ(我立)かたちとをさりて、むかふあたハぬ事也、まり※1の我うへをこえてたかくいてハ、先さきにいてゝ、まりをこめてうちむかふへし、

師説云、たうしまりをける人を、左右の人ハうち(内)にたち

なすへし、馬のりと口とり※3となるへし、左右の人ハ、ひかみいてはたすくへきよしを存して、一足もまりにハ(鞆庭)そむくへからず、うちにこめてあふへし、

19オ

※1 ② とをさりてほかにむかふあたはぬ事也、

※2 ② まりの我かうへをこえて、

※3 ② 口とりとのやうなるへし、

36 一 まりにしたふ様事※1

師説云、たとへは、いぬるなる木に、西に東むきに一人ハ立、其木の北に、南向に一人立たるに、南向の人の、木より(外)にて西向にならば、木の南の人ハ、木よりとに

枝にあたりて、かへりてものきもするハ、いくたひも我
まり也、難足の後はなつまりハ、ゆめ／＼やすくおもふ
まし、心たゆミてはなてハ、おつる也、書曰、やすしと
てもあやうきをわすれされと云々、此文ハまりにもか
へるこゝろ也、

※1 ㊦ さりとてつきてよるにはあらず、

(32) 一 まりをこふ事

式云、都督説云、有やと々々こふ間、まり(鞠数)かす三度(過)にす
きは、必たかくなかくこふへし、微音にてまりかすおほ
きハ、つれ／＼にていよ／＼かすおほくミゆと云々、又
しけき所(繁き)にへたゝりて、いたくわつらふあひた、他人い
かに／＼と、おほつかなくあやうくおもふとき、さはか
ぬよしをしらしむるために、必たかくこふへし云々、式
云、与州説云、まりはしまる時ハしきりにこふへからず、
晩景(俄か)にのそみて頻にこふへし、又ハか足の時、こゑ(声)な
きハまとひ足(惑ひ足)ににたり、必こふへし、但きりこゑ(切り声)なるへ
し、たかき鞠ハなかくこふへし、

師説云、をう、なかくこふへし、成平ハ有とこひき、又
やくわいとこひき、これいたりたる人はかり也、又やと
もこひき、是を是我物にしたるやう也、ありありとこふ
間に三度にすきは必たかくこふへし、もしおなしやうに
人(乞ひ合はせ)こひあハせハ、またこふへし、さらねは人にあふ也、
よくわかつへし、

16
ウ

西行云、おなしやうに人こひあハせたるハ、こゑのをそ
くとゝまりたる人のまり也、されハこひあハせつるにハ、
我と思人ハ、こゑをしてなかくこふ也云々、

源九云、まりをこふ様々、やくわや、ありくわや、あり
やをう、やありやをう、この中に、やくわや、ありくわ
や、こゑ長したる人なりとも、えさらん日ハこふへから
す、又云、たかく木の中にいりておほつかならんまり
ハ、をこゑになかくひきてこふへし、もしひきなる枝に
あらくつかんまりハ、きりこゑにこふへし、無左右をこ
ゑをいたすへからず、はしまりてしはらくいたすへから
す、晩景にのそみてこゑハおほかるへき也、

※1 ㊦ しけき所にいたりて、

㊦ しけき所にへたたりて、いたしわつるふあひた、

※2 ㊦ 必たかくなかくこふへし、

※3 ㊦ やくわや、ありくわやのこゑは、長したらんまり足の
いたすへきなり、らうせきの人こふへからず、長した
る人なりとも、えさらん日ハこふへからず、

(33) 一 我まり人の鞠をわかつ事

式云、与州説云、我まりハ人にとらるとも、人のまりを
ハとるへからず、はなつまりハ、身ハよらす、心はかり
をかけて、もし枝よりさはりてやかへるとうたかふへし、
十丈をのふとも、まりをおもひすてゝのちハ、よき足に
あらずと云々、

17
ウ

又とをくいてんまりをなをさんと思はんに、ちかくハな
といふとも、かならずあしを(足を当つ)あつへし、

※1 ② ちかつかすはなしといふとも、

(28) 一 足の(数)かすの事

式云、先達の口傳云、三度に(過ぐ)すくへからず、但しけき枝
のしたにてハ、其事心にまかせず、これ法のをすところ
ハ三度也、

師説云、三度を一段とする也、人のもとよりうけとるに
一足、我ふんに一足、人のもとへやるに一足、あはせて
三足也、もし枝にあたりて猶わかまりならハ、四足のた
ひハたかくなかく(乞ふべし)こふへし、一段のはしめをあらハす
ゆへ也、

(29) 一 鞠(長)たけの事

源九云、一丈五尺也云々、

師説云、まりたけハ源九説さもある事也、但成平をあふ
きて信したれば、それよりほかの事なし、丈尺のことハ
またさたもせぬ也、長實卿ハまりたけたかゝりき、成平
ハそれよりも(低なりしを)ひきなりしを、このなかほとにこのむなり、
たかきほとハ長實ほと、ひきなるハ成平ほと也、汝まり
たけハ成平ほとに(※1)そミゆる、さてあらんとも、又わかほ
とにとも、心なるへし云々、先年、修理大夫家保卿(顯季卿息)のも
とにて鞠会るとき、五男保説して教訓して云々、
まりたけのひきなるハ、うなふりて(項振りて)ワるき也、あまりた

15ウ

かきハをひへ足とミゆ、よきほとをはからふへし、たゝ
いまミゆるはすこしひきにおほゆるそ、まりハえたる事
とこそみゆれ、よくくこのむへしと云々、これをきゝ
て後、子息保成家房など、いたくたかくあけしかハ、こ
れハ柳のはんさう也とてわらハれき、

※1 ② ミゆめれ、

※2 ② うつふきてワるき也、

(30) 一 鞠はしまるをりたかゝるへき事

八條冠者光親云、まりはしまるをりハ、まりたけたかく
して、あらゝかにはなてハ、人ハさはきて我ハしつかに
おもふ也、さて人ハくるしくて、我身ハ(困ぜで)こうせて興に入
るよき也、

※1 ② くるしめて、

(31) 一 鞠(放つ)をはなつ事

式云、都督説云、はなつたひのまりハ、(宗とある)むねとある上手
のもとへやるへし、先年尊重寺のかゝりにて会ある時、
はなつたひことに近實かもとへやる、かへりて後實任う
らみをなすと云々、其故ハ、近實にをとるよしおほしめ
す、口おしき事なり、よりてうらみをなす所也と云々、
師説云、はなつまりハあらかるへからず、枝にかけすし
て、中ふくらにたしかに、人にうけとりよくはなつへし、
はなつまりを心になをかけて、人よらねは我まり也、さ
りとて(※1)よるにハあらす、心をかくへし、はなつまりの、

16オ

顯季卿也

式云、成通卿作之、依為外祖父、有殿字

大式殿

※1

みすの中より御まりを給て仰云、忠資あけまりすへきよ

し其仰あり、しかるを、忠資当座第一の上手也といへど

も辞退をいたす、よりて以淡路入道令上之畢、今案、此

儀上手のうへに、上臈を可用歟、

又白河院、六十御賀、ひくちの斎宮院内にして、藏人所

衆蹴鞠会あり、内所衆のかたよりまりをくる、玄蕃二

郎持てきたる、末遠かいはく、我身すてに一臈たり、し

たかひて此道にたえたり、しかれとも譜代たるにより

て、野所をもちいて上まりせしむへきよし、是をおほす、

よりて上臈の命にしたかひて、景忠まりをあけをハリぬ、

但三度のうち清兼かもとへ遣了、是内所の衆を賞する儀

あるか、抑時人末遠故実ありと云々、

上鞠の作法、家平にたつぬる所に、申云、成平云、御所

の方にむかひてまりをとりて、すこしうちふりて、う

ちあけて、くまりめを足にあてゝ蹴也、三足のうち、当

座の主人にまいらする也、あけまりハこふへからす云々、

後日、拾遺納言のもとにまかりて、家平か申旨如此、但

御所の方にむかひてあけんに、ゆつらんとする人あらぬ

かたにたちたらハ、いかやうに。つかまつるへきと申

しかハ、納言答云、はしめの足を御所にむかひてあけて、

つきの足ハゆつる人にむかふへし、そはさまにてやるへ

からす、ひかまりのいてくる也と云々、先人皆立きたま

14
オ

13
ウ

りて後、まりをとりて、ワか立とよりあゆミ出でて、

あしをみわたして後、ゆつらんとする人にきそくすへし、

其後あくへし、かすハ、外祖父顯季卿ハ二足にて主人に

たてまつるへしと云々、

淡路入道盛長ハ三足云々、清経ハ一足つねの事也云々、

しかれハ、高年人などハ一足よかりなんと令存也云々、

聖人西行云、あけまりハ、まつゆつらんとする人にきそく

をすれハ、うけとらんするほと答稱をする也云々、かす

ハ一足二足三足人によるへし云々、わかとしの会にハ、

当日の上手まりあけて、第二の上手のもとへやるへし、

※1 御まりをくたし給て

※2 御前の方にむかへてあけて

※3 まりのをとりて

※4 まり足をみなみわたして

※5 ゆつるへき人に

※6 うけとらんするひと

※7 答稱をする也

※8 当日の最上手まりをあけて

一 足をあくる事

源九云、足をとくあくるみくるし、ひかまりいてくるな

り、又もしきれて、よこさまなるやうにワたらんまりを

ハ、とゝめんとおもハ、さいきりてせくやうにあつへ

し、うるハしくけるにハ、かならずはかへいつる也、

14
ウ

(19) 一 扇をひらく事

式云、都督顯季卿説云、鞠の時、右手にひらくハまりあた
る、されハ左手にひらくへし、 11ウ

師説云、資方ハ、かたき所(難き所)のまりをいたしてハ、扇を二

間はかりひらきつかひて、大事をしたるよし人にミせて
後にさしき、いみしくみえき云々、

(20) 一 當日最上手人(沙汰)をいたすへき事

式云、上下臈をいはす、上手のさたとして人※1をえらひ立

へし、其人ハいつくに立といはんにしたかふへし、をの
くこのむすち(筋)のあるを、えたるやうにしたかひ、木の

やうにしたかひて、其人はそれによりかんとハ、上手
のはからふ也、其かおもしろくもあり、かす(数)もあかる也、

※1 ② 人をはからひてさすへし、

(21) 一 立人次第事

式云、清經云、鞠足の分別にしたかひて可立、但未練の 12オ

まり足のかたハらにハ、必きハまりなきは(早)や足をたつへ

し、たすけさせん(料)れうなり、未練上臈二人ならハ、其日
の会をとむへし、但上臈なりとも、野伏にたゝんハく

るしみにあらずと云々、

源九云、下足のかたハらにハ、はやあしを立也、

ひかまりもいてき、又おとし(落し)もするを、たすけさせんれ

うなり、

師説云、未練の上臈一人にすぎハ、(過ぎば)其日の会をとむ

へしといへとも、二人までハなとかかまへさらん、老年

の人をいのるやうに、其人のもとへまりのゆかんだひに、
をのく存知して扶持せは、かまへてんと云々、(構へてん)

(22) 一 先立野伏事

師説云、上手なれとも、まつ野臥にたちて、仰にもした 12ウ

(23) 一 最上手をそく立事

源九云、最上手ハ、人ミなまりはに立てのちいつへし、
よき所をあけて、そのれう(料)にをく也、さていつる、いみ
しき也、但其所にハとくゆくへし、

(24) 一 上手ハやすき所に立事

源九云、まつやすき所に立て、人々のさためによき所に
わたさるゝ、いみしき事也云々、

(25) 一 立様事

師説云、きと人々、おなしやうに立めくる也、更鞠場(木)

に立出へからず、まり(鞠の懸る)のかゝるにしたかひて、まりをう
ちにみなしてまつへし、

(26) 一 上鞠の事

式云、都督説云、二度のゝち、当日の主人のもとへやる

へし、又云、上鞠ハ上臈を可用敷可用上手敷のよし、い
また尋えす、白河院位御時、内裏にて蹴鞠會あり、

会者、

馬大夫 野監物 左衛門大夫 右京進 淡路入道
重任 忠資 近實 資方 盛長 行宗

おほするほとに、もとよりきりたる皮をもていたり、
 成平云、前にてきりてミせまいらせんところ思つれ、本
 意なき事也、但よくきりてハありとて、中よりをしおり
 て、この中を沓にあたりてきるれハひろく、足のうへに
 なりてハほそくきる也、ふときハしな^(品)く^{※2}て、みめもわ
 るき也、きるを御らんせすとも申しつれハ、おなし事也
 と云々、おほかたハひろくきりて、ひきのへて、のちほ^{※4}
 とをハしたゝむるかよき也、たゝきりたるまゝにてハ、
 ひけハほそくなる所もいてくる也云々、其ひろきとこ
 ろハ五六ふんはかり也、^{※5}
 (分)

※1 ② 嫡男家平をめして、

※2 ③ ④ もとよりきりたる足ゆひ皮をもていたり、

※3 ⑤ ⑥ 但よくきりて候めりとて、

※4 ⑦ ⑧ のちにほとをハしたゝむるかよき也

※5 ⑨ ⑩ 其ひろきところはくつのそハまでなり、ひろき一寸
 はかり、せはき所は五六ふんはかり也、

(16) 一 足結様事

件日、成平云、したうつはかせ給へ、おしへまいらせん
 とて、沓・襪とりよせて、足ゆひかハひきまハして、一
 むすひして、あまたかへりま^(数多反)とひたるかゆるかぬなりと
 て、五六反はかりま^(数多反)とひて、うしろにひきまハして、か
 たかきにむすひて、あまりをハはさみつ、成平云、足の
 さきのかたによりてゆひたるハくつろくなり、中ほとに

つよくゆふへし、

師説云、足ゆふ様ハ、左まとひのあまたまとひ也、大様
 は成平同事也、

※1 ① とりよせて、はかせて足ゆひかハひきまハして、

(17) 一 鞠輕重によりて足を結事

式云、まりすこふるかるくハ、沓の^(緒を)を^{※1}ゆるくゆふ也、
 されはまりのすこしをもくなる也、又鞠をもくハ、沓の
 を^(緒を)せめゆへは、^{※1}かるくおほゆる也云々、成平彼會日式
 文のことに申き、

※1 ② せめゆへは、すこふるかるくおほゆる也、

(18) 一 扇を腰にさす事

式云、都督顯季卿成通外祖父也説云、こしにさすハ、せなか
 におへるまりの扇にかゝりてとまる也、されハ腰によ
 こさまにさすなり、

師説云、近實ハせなかによこさまにさせり、成平此様を
 まなへり、これによりて成平かやうをつたへまなふ也
 云々、

源九云、資方もせなかによこさまにさしき、笏のやうに
 ひたりによこさまにさす人もあり、又やなくひのやうに
 右のわきにさす、經基ハいつれもかねて用也、但やなく
 ひのやうにさしたるハ、まりのあたることのある也云々、
 おほかたハまりのをりハ左の手にもつ事なれば左にさす
 へき也、

(10) 一 履事

師説云、まりのくつは、^(履・沓)いたくあたらしき、又ふるきとにも不可也、すこしはきならしたるよき也と云々、但成平ハ、ひたあたらしの沓こそよけれど、新沓を用也、^(平みぬる)ひらみぬるハ、^(延足)のひあしのをりわろき也云々、^(革厚くて)成平云、^(靴には履き)かはあつくてこハき沓ハ、成平はしめてそまりにハはきて候し、沓をはきて、またあしをいはぬをり、沓あるところをふみてしめし候きと云々、

師説云、鞆の沓ハかるかるへし、おもきハ足いたくて、まりもく^(蹴にくし)あにくし、

源九云、かハあつくこハきは、おもくてあしいたき也、かハラすきハ、沓のあしにしたかひたるかよきなり、左の沓ハ、すこしみしかくて、あしをつめたるかよき也と云々、

9オ

※1 ②③ 家敷 成平云

※2 ② あしをゆはぬさきに、^(水)みつあるところをふみて

(11) 一 鞆事

師説云、あをしらちよき物也、^(青白地)にしき・^(錦・紫)※1 1 無文のふす^(襦革)かハ、又よくいたりてはくへき物也、されハ成平ハ、したうつハあつきかハのやハラかなるかよき也、成平ハふすへ皮をこのミ候也、^(白き)しろきハ便なく候へハ、ふすへてもちい候也、此色のしたうつハ、^(年長け)としたけ、まりいたりてはくへき也、いかに

まにも四十以後のとし也云々、

※1 ②③ ^(錦・革・紫・革)にしきかはむらさきかはは、

(12) 一 頸紙おる事

師説云、上手ハ身にちかくまりにあへは、^(頸紙)くひかミのおるゝなり、成平かくひかミハ、うしろのなからはかりハつゆはかり左方によりておれき、鞆を右にみるにや、

※1 ②③ 頸紙おるゝ事

※2 ② なからよりは

(13) 一 狩衣のくゝりぬく事

師説云、はかゝりのをり、人といとむをりに、^(葉懸)かた^(片括)くゝりをぬく也云々、西行云、かた^(片括)くゝりをぬくハ、木にたつに木のかたをぬくへしと云々、

9ウ

(14) 一 足の爪きる事

師説云、まりハまつ足の爪をきる也、つめななくて、沓に爪られて、足いたきのミにあらず、つめの色くろくて、はてはうミで、かハリなともする也云々、

※1 ② くつにつめられぬれば、

(15) 一 足ゆひかハきる様事

先年成平かもとにまかりたりしに、やかて、山もとの^(懸)かゝり^(懸)とていミしき所也、成平出會て、今日究竟のまりの日にこそ候、^(空)そらのうハくもりて、風ふかす、しかるへき事也、とくく^(料)はしめらるへしとて、嫡子家平を^(刀)め^(刀)して、足ゆひかハのれうに、革とかたなとりてまいれと

10オ

式云、中品布衣也、きぬ（衣）ハひとへ（單襲）かきねたるへし、但老年の人ハかたひらをかきぬへし、わかき人も密会にハかたひらかさねん、何事有哉云々、

7才

師説云、さしぬきハ腰をおりて、沓のミゆるほとなるへし、

淡路入道、成平之師也

盛長ハたかくはさみあけてそありける、さしぬきをみしかくはさまぬハ、近實かやう也、成平、まりハ盛長をま

ねひたれとも、さしぬきのやうハ、近實をまなふるなり、

凡さるへき人ハはさまぬよし、はさむはしななき也、家

平云、成平ハさしぬきのうらをすしにてつけ候きと申し也云々、

師説云、下のはかまハすしなるへし、みしかゝるへし、

成通ト争鞠人也（袴）、忠隆卿そ、ひとへなるかりはかまをきるなる、人のこのミによるへき也、成平ハすしのしたの袴をもちゐる

と云々、

師説云、はれの會の時、かたひらをきるへからむにハ、

雲客以上の人ハ束帶のあせとりをきるへきなり、先達む

かしよりさそありける、其旨を存へし云々、

先年、宇治左府頼長、蓮花藏院のかゝりにて四月中旬蹴

鞠会あり、少將為、香の狩衣にあせとりの帷を着、頼輔、

萌木の狩衣にあせとりをもちゐたり、見證のために拾遺

納言會合之間、左府示云、あせとりハ様ある事にや、御

弟子兩人同心也、納言答申されて云、定存知様候歟、古

7ウ

實之由所存也云々、諸人頗有不審氣歟、

※1 ③④⑤ 左府被示云、

(6) 一 常にこハき物をきて習へき事（強き）

成平云、内々なれハとて、なへたるなりをのミしてなら

ひぬれハ、こハき物きてはれにいつるをりあしき也、こ

ハき物をきてならふへしと云々、

(7) 一 烏帽子事

式云、与州説云、烏帽子ハこハかるへからず、ゆへいか

んとなれハ、まりのあたるとき、まりにしたかひておち

ぬなり、

(8) 一 鞠の烏帽子常ならぬ事※1

師説云、長實卿、鞠のをりハゑほうしぬけあかりたる難

にもあらず、又みせにゆふも常の事也、

※1 ③④ 鞠のときの烏帽子

(9) 一 額とゝめの事

師説云、昔ハゑほうしのしりさかりておちさりき、近代

はしりたかくておちぬへければ、ゑほうしとゝめとてす

れとも、あせたりてぬくるのミにあらず、をのつからお

つる事のあれば、ひたいとゝめをしたれハ、物にあたれ

ともおつる事なし云々、其様ハ、あかゝねにて、本ハ一

にて、すゑをふたまたにして、ゑほうしのこへりにさし

たるなり、秘する事にて人にミせすと云々、

※1 ③④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩ ⑪ ⑫ ⑬ ⑭ ⑮ ⑯ ⑰ ⑱ ⑲ ⑳ ㉑ ㉒ ㉓ ㉔ ㉕ ㉖ ㉗ ㉘ ㉙ ㉚ ㉛ ㉜ ㉝ ㉞ ㉟ ㊱ ㊲ ㊳ ㊴ ㊵ ㊶ ㊷ ㊸ ㊹ ㊺ ㊻ ㊼ ㊽ ㊾ ㊿

8才

8ウ

(1) 一 蹴鞠時節事

5ウ

荆楚歳時記曰、冬節をさりて百五日、清明二日ニありと※1

云々、今案、蹴鞠ハ冬節のち百五日にはしむべきか、※2

しからは正月中旬にや、如注者、清明のまゝ二日者三月節のまゝ二日歟、又云、冬至のち百日※3ならは、三月節※4

中旬にをよはんか、或云、三月上旬也、正月※5念々、二月※6餘寒猶在云々、

剋限、式云、申一點にはしむへし、日とく暮て、餘興つきすして後会をちきる、いミしき也、(契る)

源九云、春のはしめのまりをあげそむるにハ、申日をも(鞠を上げ初むる)

ちるる也云々、其後、拾遺納言頼朝ノ師也、成平弟子也、男神文十徳并七代、のものとにまかりむかひてこのよしを申に、わらひて、たれかいひしと

たつねよと侍しかハ、源九かまうてきたりしに申かハ、

監物清経か説也、忠資小野説云々、又此よしを納言に申す、

忠資か説ならハ資方・景忠きくへし、各さる事いはす、

源九かあまりことをいひいたせる也、もちいるへからすと云々、6オ

と云々、

源九云、春のはしめには、をそくはしめてをそくは(果つべし)

し、夏(懸)か(疾く果つべし)は、はやくはしめてとくは(葉か)つへし、葉か

ふりハとくくくなるゆへ也、春ハさるのはしめより(申)

とりのをハリまで、夏ハ未時より酉の中らまで、たゝし(西)

興に入ておもしろくハ、くらくなるをかきりとすへし、

※1 (ヨ) (ヒ) 冬節をさかりて百五日

※2 (ク) 注曰、清明前二日ニありと云々

※3 (ク) 又云、冬至をさりて百六日云々、今案、蹴鞠ハ……

※4 (ク) 冬至のち百六日ならは、

※5 (ヨ) (ク) (ヒ) 式云、

※6 (ク) (ヒ) 正月公事念々

(2) 一 蹴鞠吉日事

式云、風ふかて雨ふらす、くもりたる日也、景忠云、

資方成平トアラソヒン人也か申候しハ、雨のまゝうしろ両日をよき日とするな

り、最究竟日ハ、尊重寺のか(懸)ふりにて会はて※1、かへさ(帰さに)に

一条大宮の辺にて雨ふるなり云々、

源九云、春のはしめにハ、うハくもりて風ふかぬをよし

とす、夏ハすこし風ふくよし、天晴たるをよしとするな

り、6ウ

※1 (ヨ) (ヒ) 会はてて、かへりさまに、

(3) 一 會者のかすの事

式云、會者八人、野伏両三云々、野伏ハ大切ならねとも、

むかしよりいひつたへたる事なれハ、注記するなり云々、

(4) 一 舊老の鞠足見證すへき事

式云、癡忘のふるき上手かならず見證すへし、

師説云、ふるき上手の見證にはあるへき也、あしきよき

をしらぬ人のまゝにてハ興なき也、みしりたる人のみる

にハ、まりもよく、かす(数も上がる)もあかるなり、

(5) 一 會者装束事

蹴鞠口傳集并序

前雍州刺史藤原賴輔撰

4才

夫以蹴鞠之為事源、起自蒼波万里之異域、塵遍于赤縣九陌之

皇城、上始帝闕、下至民家、學之者多自牛毛、成之者少麟角、

或落帽於地、或揚履於天、稟天骨而可好、隨地形而可翔者歟、

就中左轉右延者世之所難也、一益九損者人之所知也、居鷹打

鞭之躰、其諺猶殘、追鹿並轡^{※1}之心、其趣可比、若傍大樹而

落者、踏樹^二刎足^一、若揚高檐^二而流者、入檐向面、高礙

以遠去之時、拾足^一遂延、卑當後落之處、緩腰早反、又縮躰

偷待、急心相隨、凡厥口傳不遑毛舉、方今天下士女之稱達人、

近則賀茂成平、小野忠資、次有野五云者、教子相繼、次有源

九云者、遁世猶存、況後入道左相府達此道也、去春薨逝、

盛長歟^{花園歟}、淡州前刺史之長斯事也、往年卒去、西郊^一戀德、則花蘭廢而

主何在、東洛訪跡、亦柳殿荒而人不歸者也、爰拾遺納言、有

智有能、多才多藝、詩哥春遊文章出万人之右、管絃夜興聲名

聒一朝之間、然猶行有餘力、究此奧術、獨步于紅桜之庭、明

足有數、鷹揚于青松之砌、上手無雙、加之或撰一卷譜以貯

家、或作卅條式以弘世、誠是道之宗匠、人之尊師也、予庭上

受訓、類孔鯉之常趣、門下仰恩、同司馬之為走、無顧我性

之不堪、更耽此道之有興也、春秋卅五歲、浮沈廿六年、披譜

而談議之時、忽覺秘術矣、傳式文而拜悅之所、弥授奧義焉、

花前時々、屢列上皇之觀覽、樹下處々、常交傍人之佳遊、

然而譽非雄飛、心唯雌伏、抑亦不嫌貴賤、不論縉素、示彼藝

5才

之舊貫、語此事之前蹤、傾耳一聞之、銘肝注之日記條々、年積重々、且勒為上下卷、名蹴鞠口傳集、但是無終遍之期、尋漸可加文之故也、云爾、

※1 ㊦㊧㊨ 為事源也、

※2 ㊩ 縫腰

- (43) 腰をおとしすふる様
- (45) 右袖左ニ遣事
- (47) 足ふミ様
- (49) 後足不可踏事
- (51) 左足あひしらふ事
- (53) 烏躍事
- (55) 延足事
- (57) 空延事
- (59) 左延事

- (44) 袖持様
- (46) 袖を引事
- (48) 三拍子事
- (50) 小躍事
- (52) 男足妻足事
- (54) 左足ならす事
- (56) 延足不可怠事
- (58) 返延足事
- (60) 右延事

目録

上帖

- (1) 鞠時節事
 (3) 會者数事
 (5) 會者装束事
 (7) 烏帽事
 (9) 額留事
 (11) 鞆事
 (13) 狩衣袖ノ括ヲ拔事
 (15) 足結革切事
 (17) 鞠依輕重結足事
 (19) 扇開事
 (21) 立人次第事
 (23) 最上手遅立事
 (25) 立様事
 (27) 足上事
 (29) 鞠たけの事
 (31) 鞠を放事
 (33) 我鞠人鞠知事
 (35) 鞠をこむる事
 (37) 鞠に付て寄事
 (39) 身にそへて落上へき事
 (41) 身をつかふ事

- (2) 蹴鞠吉日事
 (4) 舊老鞠足可見證事
 (6) 常強物可着用習事
 (8) 鞠帽不常事
 (10) 履事
 (12) 頸紙事
 (14) 足甲切事
 (16) 足結様事
 (18) 扇腰指事
 (20) 當日上手致沙汰事
 (22) 先立野臥事
 (24) 上手易所立事
 (26) 上鞠事
 (28) 足数事
 (30) 鞠始時可高事
 (32) 鞠を乞事
 (34) 鞠合様事
 (36) 鞠したふ事
 (38) 身躰事
 (40) 静落可上事
 (42) 頸持様事

蹴鞠口傳集上卷（前田育徳会尊経閣文庫所蔵）翻刻

凡例

一 本篇は前田育徳会尊経閣文庫所蔵「蹴鞠口傳集上卷（上・下帖合せて一冊）」の翻刻である。

二 できるだけ原文に忠実に翻刻するようつとめたが、読解の便誼を考えて読点・並列点を付し、また仮名・漢字ともできるだけ通用の字体にあらためた。

三 本文の送り仮名、および序文の返り点は原文のままである。

四 目録及び本文の各箇條の上欄括弧内数字は箇條の通し番号である。（但し底本にはない）。また下欄の数字・仮名は底本の丁数・表裏を示す。

五 校合本として宮内庁書陵部所蔵本（略符㊦、伏見宮家旧蔵、たゞし上帖のみ）、陽明文庫所蔵本（略符㊧、近衛家熙「一六六七」一七三六）筆、平野神社所蔵本（略符㊨、難波家旧蔵、難波宗城「一七二四」一八〇五）筆を用いた。底本・校合本を選んだ理由に関しては、本紀要別稿を参照されたい。

底本に明らかに脱文があると認められる部分、校合本のほうが意味が通り易いと思われる部分、また両者の間に意味の違いがあると思われる部分を本文中に※印で表示し、それらを各箇條の末尾に注記した。

六 底本の行間の書込み、本文中の割書等は活字を落してその部分に表示し、翻刻者の注記、振仮名・漢字は括弧を付して示した。

以上

（覆い表紙）

蹴鞠口傳集 藤原頼輔撰 一冊

別題 蹴鞠秘抄

「

（内表紙）

へし右のまなしりにみあつといへともうるへしと正方よりあへへし
しもしかたよらはをのつからひかまりいてきたるにあふとき右の
袖をひらきて左の袖の

親長（花押影）

（朱書）
古書言

（朱書）

蹴鞠口傳集上下藤原頼輔輯

（朱書）

辛酉菊月初旬感得

（朱書）

春日神主右京所持

就足革羽秘抄上下

蹴鞠譜拾遺亜相

蹴鞠口傳集上卷(前田育徳会尊經閣文庫所蔵)翻刻

渡 辺 融

東京大学教養学部

Translation of the First Volume of the Secret
Books on Shukiku—A Possession of the
Ikutoku Maeda Foundation's Sonkeikaku Library—

Toru Watanabe

Dept. of Sports Sciences, College of Arts and Sciences,
The University of Tokyo.